家族はプリキュア

嶋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
家族はプリキュア

【Ｎコード】
Ｎ３４１０Ｚ

【作者名】
嶋

【あらすじ】
ピクシブで連載されている小説を移す事にしました。物語はラブとせつなの娘が主役で、ラブとせつなは母親と言う立場で家族を中心に描いた物語です。歴代主役プリキュアはゲストとして出していきます。

登場人物１

登場人物１

桃園ラブ／キュアピーチ（３６）

かつてはキュアピーチに変身して戦っていた。せつなと一緒に結婚してせつなとの間に同性出産で自分そっくり子供を産んだ。現在は四ツ葉町を離れてせつなと子供と一緒にミッドスターという世界で心星町へ暮らしており、仕事はほぼ彼女が勤めている。プリキュアの力は今でも維持している。

桃園せつな／キュアパッション（３６）

元ラビリンス幹部。かつてはキュアパッションとして戦っていた。ラブと一緒に結婚してラブとの間に同性出産でラブと同じく自分そっくり子供を産んだ。現在はラビリンスを離れてラブと子供と一緒にミッドスターという世界で心星町へ暮らしている。プリキュアの力は今でも維持しており、家事は全部彼女が任せている。名字は桃園と名乗っている。

桃園アイ／キュアアップル（１４）

イメージＣＶ：戸松遥

ラブとせつなの間で生まれた子供。ラブのお腹から出産した女の子で、元気よく明るい性格で運動、家事の２つを得意としている。勉強が少し苦手な面がある。彼女は運動が抜群で、学校のクラスにおいて１番である。学校ではいつもマコトと一緒に過ごしたりする事が多く、休日は家族と過ごす事が一番多い。

ラブとせつなの二人の母親思いは一番で二人の母親になつく事がある。嫌いな物はにんじん、爬虫類の２つである。プリキュアとしてはキュアアップルに変身する。

掛け声「幸せ掴むんだから！」

桃園マコト／キュアチェリー（１４）
イメージＣＶ：豊崎愛生
ラブとせつなの間で生まれた子供。せつなのお腹から出産した女の子で、大人しくてて優しい性格でアイと同じように勉強、運動、家事の３つとも得意である。彼女は学校のクラスにおいて運動はアイに次ぐ２番目で、成績はクラスにおいてトップである。学校ではいつもアイと一緒に過ごしたりする事が多く、学校ではいつもマコトと一緒に過ごしたりする事が多く、休日は家族と過ごす事が一番多い。
ラブとせつなの二人の母親思いは一番で二人の母親になつく事がある。嫌いな物はピーマン、オバケの２つである。プリキュアとしてはキュアチェリー変身する。
掛け声「一生懸命負けないくらいやるわ。」

プリキュア１
キュアアップル
アイが二人の母からリンクルンと専用ピックルンのリルンを渡されて、プリキュアに変身した姿。ピーチと同じ色と髪をしたレモンイエローのツインテールが特徴。イメージカラーは桃色と赤で、服装の色全体が桃色で、細かい部分は赤。少しキュアピーチと似ているところが多い。

必殺技
プリキュア・ラブハート
手をハートの形にして放つ桃色の光線技。キュアピーチの放つプリキュア・ラブサンシャインに似ている。

キュアチェリー
マコトが二人の母からリンクルンと専用ピックルンのミルンを渡さ

れて、プリキュアに変身した姿。パッションと同じ色と髪をした淡いピンク色となり、腰まで伸びるような長髪が特徴。イメージカラーは桃色と赤で、、服装の色全体が赤で、細かい部分は桃色。少しキュアパッションと似ているところが多い。

必殺技
プリキュア・ハピネスハート
手をハートの形にして放つ赤色の光線技。キュアピーチやキュアアップルと同じ放つ光線技である。またキュアパッションもこの３人と同じ光線技を放つ事が出来る。

キュアピーチ
ラブがピルンの力によって変身するプリキュア。姿はかなり１４歳の時と異なっている事で、大人としての姿は髪型やコスチュームが変わっていて、スカートがムーンライトと同じロングスカートを着用してて、足にパッションと同じタイツを着用している。服の色が全体が桃色、細かい部分は赤、白。髪型がツインテールからロングヘアとなっている。これらのコスチュームの変更は大人としてのキュアピーチの姿を表している意味でもある。またパッションと結婚した事によってお互いのピックルンの力を共有して使う事が可能になった。

必殺技
プリキュア・ラブサンシャイン
手をハートの形にして桃色の光線技を放つ。

キュアパッション
せつながアカルンの力によって変身するプリキュア。姿はピーチと同様に１４歳の時と異なっており、大人としての姿は髪型は１４歳のままとは変わらず、コスチュームの方は黒の部分が白、ピンクに

変更されており、アームバンドはピーチと同様短いのに変更されており、スカートはピーチと同じロングスカートを着用している。服の色が全体が赤、細かい部分などは桃色、白。これらのコスチュームの変更は大人としてのキュアパッションの姿を表している意味でもある。またピーチと結婚した事によってお互いのピックルンの力を共有して使う事が可能になった。

必殺技
プリキュア・ハピネスウェーブ
キュアパッションの唯一の光線技。手をハートの形にして赤の光線技を放つ。

合体必殺技
プリキュアファミリーハート
アップル、チェリー、ピーチ、パッションの母子プリキュアのそれぞれの合体技を同時に繰り出す合体技。

プリキュアクアドラプルパンチ
アップル、チェリー、ピーチ、パッションの母子プリキュアが４人同時に繰り出すパンチ攻撃。威力は巨大な敵を吹き飛ばすほどの威力を持つ。本来ならベリーとパインと一緒に組んでやる技だが、ピーチとパッションの双子の娘のアップルとチェリーでも一緒に使用する事が可能。

プリキュアクアドラプルキック
アップル、チェリー、ピーチ、パッションの母子プリキュアが４人同時に繰り出すとび蹴りを放つ技。こちらもプリキュアクアドラプルパンチと同様アップルとチェリーでも一緒に使用する事が可能。

プリキュアコンビネーションキック

アップル、チェリー、ピーチ、パッションの母子プリキュアが４人が同時に空中から降下しながら　飛び蹴りを繰り出す合体技。こちらもプリキュアクアドラプルパンチやプリキュアクアドラプルキックと同様アップルとチェリーでも一緒に使用する事が可能。母子でも一緒に合体技を使う事が可能。

第1話　私たちプリキュアをはじめます（前書き）

第一話はアイとマコトがプリキュアに変身するお話です。戦闘や敵はまだ次回から出てくるので、1話は日常もので家族との生活や少しだけ学校生活で。

第1話　私たちプリキュアをはじめます

かつて世界を救った二人のプリキュアはお互いに思いやり、愛し合いながらその二人のプリキュアはやがてお互いに結ばれる事になった。

それから結ばれた二人のプリキュアは、女性同士でありながらそれぞれ母体から命が宿り、そして子が生まれた。生まれてから１４年の歳月が経った。

「ラブ、アイ、マコト、３人とも起きて？。」ラブとその二人に声をかけるせつな。

「今起きるからまってて！」

「せつなママ、今起きるから～。」

「私もアイもラブママも今そっちへ行くから～．」その二人からママって呼ばれているのはラブとせつな。ラブとせつなのの二人はかつて伝説の戦士プリキュアとして活躍して世界を救い、今は二人は結婚して女性同士による同性間出産でそれぞれ子供を出産した。

アイはラブが生んだ子で、元気で明るい１４歳の少女。彼女は勉強はいまいちだが運動や家事などは得意。かつて母ラブと同じプリキュアだったなぎさ（キュアブラック）と咲（キュアブルーム）に似ているところが少しある。目の瞳や髪の色や性格も１４歳の頃のラブにそっくりなところがある。

マコトはせつなが生んだ子で、大人しくてて優しい１４歳の少女。

彼女は勉強や運動や家事が全部得意。かつて母せつなと同じプリキュアだったほのか（キュアホワイト）と舞に似ているところが少しある。目の瞳や髪の色も性格も１４歳だった頃のせつなにそっくりなところがある。

それから朝を起きて３人はせつなの作った朝食を食べる事になった。

「いただきます！」二人の母親と二人の子供と４人一緒に朝食を食べながら楽しそうに送っていた。

「せつなのがいつも作っている朝食はおいしいわ。」

「あらラブ、ありがとう。」せつなはラブの頬に唇を優しく近づけた。

「ラブの事をいつでも愛しているわ？」唇を近づけた後、ラブにそう告げた。

「わあ？、せつなママ、ラブママだけにチュウするなんてずるい？。」

「ねぇせつなママ、私やアイにもほっぺにチュウして。」二人の娘も母せつなにもう一人の母ラブみたいにチュウして欲しいと求めてきた。

「アイやマコトにも今からせつなママのチュウしてあげるわ？」アイやマコトの二人の娘にもそれぞれの頬に唇に近づけた。

「せつなママはラブママもアイもマコトの事を愛しているわ。」

「あたしも二人のママの事大好きよ。」

「　私は二人のママが大好き。」

「アイもマコトも大好きって言っちゃって、もう?」アイやマコトに抱きついついて二人の顔に近づけてすり寄るラブ。朝食が終わって、家を出てラブは仕事に、アイとマコトは学校へ行った。学校で二人は同じくクラスでありながら、学校での生活を送っていた。

「アイ、マコト、おはよう。」

「由樹もおはよう。」由樹は二人の同じクラスの同級生。

「二人ともいつも一緒に学校に通っているわね。」

「うん、あたし達双子だからいつも一緒よ。」

「双子わりにはアイは運動が得意でも勉強とかいまいちでしょ。」

「それ言わないで?。」

「アイったら少しなぎささんに似ているところがあるわね。」明るい学校生活をいつもながら不公平な事なく送る二人。時間が経ち、ようやく放課後に学校から下校して自宅へ帰宅した二人。

「ただいまー。」

「二人ともおかえり。」家から帰ってきた二人の娘を笑顔で出迎えた。夕食はいつもせつなが作っているんだが、今日はラブが仕事が早く終えたから今日の夕食はラブと一緒に作る事になった。

「今日の夕食はダブルママの特製ハンバーグと野菜炒めとカボチャのスープよ。」今夜の夕食は二人が作ったハンバーグと野菜炒めとカボチャのスープであった。特にハンバーグはラブが１４歳の時によく作った事があり、せつなも桃園家にいた頃はラブの母あゆみからいろいろと料理を教わったり、学んだりして、彼女も今は母親として大事な我が子達に食べさせる料理など作れるようになっていた。

「ええー、あたしの嫌いなにんじんがある！」

「私、ピーマンは無理・・・・。」

「二人とも好き嫌い言わないで食べなさい。」

「はーい。」夕食を食べ始める４人。野菜炒めを口に加えようとしている二人の娘の姿を見る二人の母親。

「何か、昔の事を思い出しちゃうわ～。」

「私やラブも１４歳の頃は好き嫌いがあったから。」

「にんじん食べるのがどれだけ苦手だったか思い出すわ。」

「子供達の前にかっこわるいところを見せるわけにもいかないからちゃんと嫌いな物を克服するのに大変だったわ。」昔、まだ１４歳だった頃自分たち二人にも苦手な物をあった事を思い出し、大人になってきてからは苦手な物を克服するようになってきて、嫌いな物を食べれるようにしないと思ったラブとせつな。それから食事が終えたらアイとマコトは二人の母親に呼ばれて、部屋へ入室した。

「ラブママ、せつなママ、どうして呼んだの？」

「あなたたち二人に渡したい物があるのよ。」

「渡したい物？」

「うふふ、二人がママの持っているあれと同じよ。」アイとマコトに自分たち二人が持っている物と同じ物を見せた。

「これって、もしかして？」

「ママ達がプリキュアに変身する時に使うリンクルン？」

「当たり～！」アイとマコトはラブから渡されたのはラブとせつなが持っているリンクルンだった。

「どうしてママ達は私とアイに渡したの？」

「ママね、ラブママと一緒に相談したのよ。アイやマコトが１４歳になった時にあなた達二人にプリキュアの力を渡す日を待っていたのよ。」

「プリキュアになるって事は世界を守らなきゃいけない使命と責任感を背負わなきゃいけないのよ。でも使命や責任感だけじゃなくてみんなを守りたいというその強い想いがあって最後まで戦えたのよ。」ラブもせつなもプリキュアとして世界を守る強い使命と責任感を背負いながら戦って来た。また使命や責任以外にもみんなを守りたいというその強い気持ちも持ちながらプリキュアに変身して戦った。

「プリキュアとして・・・・。」

「あなた達二人もプリキュアになったら大変かもしれないけどママ達がちゃんといろいろ教えてあげるからね。」

「うん、あたしもママやなぎささん達みたいにプリキュアになれるんだね。」

「私とアイがプリキュアになって世界を守る・・・・。」母達と同じプリキュアなれる事と、プリキュアになって世界を守る事でもあった。

「ママ、あたしママ達みたいにプリキュアになってみんなを守ってみせるよ。」

「私とアイがママみたいにプリキュアになる事はママと同じようにプリキュアになれるって事だね。」

「じゃあ二人とも受け取って。」二人にそれぞれのリンクルンを手渡し、またリンクルンを渡したと同時にプリキュア「に必要な変身キー『ピックルン』、アイにはリルン、マコトにはミルンを渡した。

「ママ、早速変身してみるよ。」

「じゃあ変身するよ。」リンクルンにそれぞれの必要なピックルンが変身した鍵を刺した。それに反応し、カバーが開き、ボタンを押して、発光し始めた。

「チェンジ！プリキュア！ビートアップ！」光が満ちて、アイとマコトの2人はその光によって髪と服が一変し、髪は伸び、服はダンス衣装のようなドレスに身を包み、腰にリンクルンをかけた。

「これが、あたし達・・・・。」プリキュアに変身した姿に驚く二人。

「あたしとせつなにそっくりよ。」

「アイとマコトが変身した姿って私とラブした変身した姿に似ているわ。」アイとマコトがプリキュアに変身した姿は、母が変身したキュアピーチ、キュアパッションにそれぞれ少し酷似していた。

「あたしがキュアピーチ？！」

「私がキュアパッション？！」母が変身していたプリキュアに酷似している事に驚いた二人。

「なんだか親がプリキュアだったから子がプリキュアに変身して、変身したのが昔のあたし達って・・・・・。」

「でも服装とかが少し違うわ。」

「でもプリキュアに変身できたんだからこれからはプリキュアとしてちゃんとやっていかないと。」

「そうよね、ママと同じプリキュアになれてよかったわ。」

「二人がプリキュアに変身できたのは良いけど・・・・・。」

「昔の私たちに似ているって言うのが・・・・。」初めて、プリキュアに変身したアイとマコト。物語はまだ始まったばかり、これから先プリキュアとして待ち受ける数々の運命が立ちはばかろうとし

ていた。

次回　2話へ続く

第2話　私たちの初めての戦い（前書き）

第二話は初めての戦闘とこの小説における敵キャラです。少し変わったところも少しあります。

第2話　私たちの初めての戦い

ラブとせつなの双子の娘アイとマコトが二人の母親と同じようにプリキュアに変身したが、まだ変身したばりでプリキュアの名前が決まっておらず、戦闘経験もあらずプリキュアとしてはまだまだ・・・・であった。

「キュアピーチがラブママだから、キュアブラックがなぎささんで、キュアメロディが響さんで・・・・・・。」

「キュアパッションがせつなママだから、キュアホワイトがほのかさんで、キュアリズムが奏さんだから・・・・・・。」二人は母やなぎさやほのか達はプリキュアに変身するとき名前をあげる事に対して二人はプリキュアに変身して名前をを何にするのか考えていた。

「二人ともどうしたの？」ラブとせつなの母親二人が近くにやって来た。

「実はね、私とアイがプリキュアに変身して名前をあげるのにいろいろ考えていたのよ。」

「ラブママとせつなママはプリキュアに変身した時にどうやってプリキュアの名前を言ったの？」

「うーん、ママも最初プリキュアに変身した時はプリキュアの名前は自分でもわからないわ。」

「みんな最初にプリキュアに変身した姿はいきなり名前をあげてたわ。」

「うーん、なんて言う名前で名前で決めれば良いんだろう。」
「じゃあ、あたしはラブママのピーチから名前取ろうかな～。」
「私はせつなママ達のキュアパッションの名前を使っていこうかな～。」
「こら、ママ達の名前から使う事は許さないわ。」
「いいじゃん、親子なんだからキュアピーチって名乗ってもいいじゃん。」
「同じ名前が二人もいるとママは困るわ。」
「変身姿が似そっくりはわかるけど、名前も同じだと少し困るわ。」プリキュアである母二人から姿が似ていても生も同じになると同じ名前は一つにして欲しいと断られ、自分たちが変身するプリキュアの名前を二つも名乗られるとやっぱり困ると思い、却下を言い渡した。それからアイとマコトは外へ歩き回りながら未だに自分たちの変身するプリキュアの名前の事を未だに考えていた。
「そっちは名前決まった？」
「ぜんぜんよ。」
「ママったら別にママのプリキュアの名前を使っても良いのにどうしてダメなのかな？」
「プリキュアの子供なのに親の名前使っていいのに。」そう愚痴を

言いながら歩いていく。二人が遠く離れた場所から一人の不審な人物がこの町に突如現れた。

「ここがミッドスターか、あのお方からまずはここを征服しろと言われた。この世界はどうやらまだ我々の存在に気付いていないそうだな。」不審な人物はこの世界を征服するために送られてきた事で、その人物からとてつもない邪気が漂っていた。

「この世界を征服してここを拠点としていく。」その頃、アイとマコトの二人はスーパーマーケットでそれぞれの果物を買って、おやつに食べていた。

「このリンゴおいしいわ。」赤くて綺麗なリンゴを手で持ちながら食べ歩くアイ。

「さくらんぼもおいしいわ。」小さくて可愛いさくらんぼを1つずつ食べるマコト。

「それにしてもプリキュアの名前適当に決めたほうがいいかな～？」

「適当はダメよ、適当な名前使うとプリキュアが台無しになっちゃうから。」

「でも名前決めないと名無しのプリキュアって言う訳にもいかないから。」そう言いながら二人はプリキュアの名前を考えていた。二人は街角を通り越してすぐ近くにある公園へと入った。

「なんか公園に来ちゃったね。」

「公園にいくと少し落ち着くわ。」公園のベンチに座って二人は少

し気分を落ち着かせて、周りが賑やかな雰囲気を見ていた。

「公園でこうしているとみんな楽しく過ごしているわね。」

「小さい頃はラブママとせつなママによく連れてこられた事を思い出すわ。」

「公園でよく砂場で一緒に遊んだり、ブランコに乗ったりしていたわ。」幼い頃、二人の母親によく公園へ連れて行って一緒に遊んだ事を思い出す二人。母親との思い出を一番大事にし、母親の事を一番大好きである二人。公園に不審な人物が近くにやってきた。

「この世界の人間共は下らない毎日を過ごしているそうだな、実に下らん。まあいい挨拶代わりにこの世界の人間共に我がヘルエビルの力を思い知らせてくれる。」突如姿を変えて、赤い衣装の格好をして現れた。

「俺の名はガーレッド、ヘルエビルの幹部の一人！！お前達に恐怖と地獄を味合わせてやる！！」その人物はガーレッドと名乗り、謎の組織ヘルエビルの幹部の一人。服のポケットから不気味なカードを出して滑り台に投げつけた。

「出でよ、イライラー！！」カードに投げつけた滑り台は怪物イライラーにさせて、公園にいる人達に襲いかかった。

「イライラー！！」

「きゃあー！！」

「助けてー！！」滑り台イライラーから逃げていく人達・

「ん？」

「何か騒がしいわ？」急に人が騒いでいる声を聞いて近くへ駆けつけた。

「何あれ？！」公園で暴れているイライラーを初めて光景する二人。滑降部を鞭にして地面にたたきつける滑り台イライラー。

「イライラー！！」

「こっちに来るよ。」こっちに襲いかかってきて二人はそのままあわてて逃げはじめた。

「わあっ！！」後ろから足で踏んづけようとしてくる滑り台イライラーから走って逃げ回り、公園内を逃げ回り続けるアイとマコト。どこか隠れそうな場所を必死で見つけ出そうと滑り台イライラーから逃げ回る。

「どこか、隠れそうな場所ないのかな？！」

「ああー、もうどこにあるのー！！」走って走って逃げ回っても隠れるところが見つからなくて焦りだし、このままでは二人ともピンチに晒されてしまう危機に陥ってしまう。

「イライラー！！」

「はあ、はあ、はあー。」

「もうだめだわ、逃げ切ってだめだわ。」

「ここで諦めちゃだめよ、まだあたし達にままからもらったプリキュアに変身する力があるのよ！」

「でも名前がまだ決まっていなくて・・・・。」

「とにかくプリキュアに変身して戦う事が大事よ！二人で変身しようよ、マコト。」

「アイも一緒にママからもらったプリキュアの力をここで見せてあげないと。」ポケットからリンクルンを取りだして、リンクルンにそれぞれの必要なピックルンが変身した鍵を刺した。それに反応し、カバーが開き、ボタンを押して、発光し始めた。

「チェンジ！プリキュア！ビートアップ！」光が満ちて、アイとマコトの2人はその光によって髪と服が一変し、髪は伸び、服はダンス衣装のようなドレスに身を包み、腰にリンクルンをかけた。

「イライラー！！」

「ん、なんだあれは?！」ガーレットは逃げ回っていた二人がプリキュアに変身した姿を目の当たりを光景した。

「勇気と愛のハート、キュアアップル！」プリキュアに変身したアイは自らキュアアップルと名乗った。

「優しさと幸せのハート、キュアチェリー！」プリキュアに変身したマコトは自らキュアチェリーと名乗った。

「フレッシュプリキュア！！」プリキュアに変身した二人は、プリ

キュアの名前を自分で名乗りを上げた。

「プリキュアの名前やっと決まったよ！」

「私もよ！」

「あたしの名前はキュアアップル」

「私はキュアチェリーよ。」それぞれ自分たちが決めた名前を言い、ようやくプリキュアの名前が決まって喜ぶ二人。

「プリキュアか、この世界にも現れるとは厄介な事だ。イライラー！！」

「イライラー！！」滑り台イライラーは滑降部をプリキュアに向けて叩こうとした。バシっ！！！

「ん？！」滑り台イライラーの滑降部を手で掴み、そのまま思いっきり勢いよく投げ飛ばそうとした。

「はあああっ！！」手で掴んだイアイラーをそのまま投げ飛ばして、地面に思いっきりぶつけた。

「イライラーっ！！」

「むっ！」プリキュアの力をみて驚愕し、今後の驚異となられる存在と感じ、ヘルエビルに大きな存在としてなられる事になった。地面から立ち上がった滑り台イライラーは今度は足で踏みつぶそうとした。

「アップル、来るわよ！」

「チェリー、かわすよ！！」振り下ろしてくる足をジャンプしてかわして、空高く身体を華麗に舞ながら同時攻撃でお見舞いしようとした。

「行くよ、チェリー。」

「アップルも一緒に仕掛けるわ。」

「ダブルプリキュアキック！！」滑り台イライラーに急降下しながら飛び蹴りを繰り出す。

「グオオオー！！」二人の同時攻撃で倒れはじめるイライラー。

「今よ。」二人はそれぞれ頭上で両手を叩いてから、左右の腰元に手をおき、　胸の前で両手を使ってハートの形を作った。

「悪いの悪いの飛んでいけ！！」

「プリキュア・ラブハート！」

「プリキュア・ハピネスハート！」それぞれのプリキュアから放つハート型の光線がイライラーに向けた。

「イライ・・・スッキリー・・・・・。」プリキュアの放つ光線で敵は浄化され、元の滑り台に戻った。

「プリキュア、このことはあのお方に報告せねば！」一旦引き上げるガーレット。

「やった！！」

「初めての戦闘、楽勝だったわ。」プリキュアとして初めての戦闘は、苦戦もなくそのまま簡単に倒す事が出来た初戦であった。自宅に帰った二人は二人の母親と一緒に夕食を食べながら会話をした。

「公園に怪物が現れた？」

「あたしとマコトはプリキュアに変身してその怪物をやっつけたのよ。」公園で怪物が現れてアイとマコトがプリキュアに変身してその怪物をやっつけた事を聞かされたラブとせつな。

「ママやなぎさや咲やのぞみ達も最初は怪物が現れてそこに妖精が現れて初めてプリキュアに変身して戦ったのよ。」昔の事を思い出して自分も最初、怪物に遭遇してピンチになったときそこで初めてプリキュアに変身して怪物と戦ってきた。

「ママ、アイとマコトの二人がプリキュアになってママ達と同じように怪物と戦う事になるんだね。」

「ママももし二人がピンチの時になったら津でも駆けつけに来てあげるからね。ママ達もプリキュアの力は今でもあるのよ。」

「それと、ようやく私たちの変身するプリキュアの名前が決まったよ。」

「えっ、二人とも名前は決まったの？」

「名前はキュア何？」アイとマコトがようやく自分たちが変身する

プリキュアの名前が決まったと娘達がどんな名前のプリキュアか今から双子の娘から口に出して言おうとした。

「あたしはキュアアップル。」

「私はキュアチェリー。」アイからはキュアアップル、マコトからはキュアチェリーとそれぞれのプリキュアの名前をプリキュアである母ラブとせつなに紹介した。

「ママ達のプリキュアの名前に少し似ているわ。」

「姿も名前も似ているんなら親子でプリキュアはどうかな？」

「二人のママと一緒に変身して戦うのもあたしは見たいな。」

「ウフフフ、ママのプリキュア姿はいつでも見せてあげるわ。」

「ママのプリキュア姿はとてビューティーかも？」

「ママがプリキュアに変身する姿今見せて。」

「写真で見ているのしかないからラブママとせつなママの二人がプリキュアに変身して生で見るのも是非見せて。」アイとマコトの双子の娘から母親がプリキュアに変身した姿をどうしてもこの目で見たいと求められてきた。

「ダーメ、今は変身しません。」

「今度変身するからそれまでに我慢してて。」

「ああ〜、もうママったらけち。」

「生で見たかったな。」アイとマコトがプリキュアとしての初めての戦い、そして謎の組織ヘルエビルが今後、どういう展開を巻き超すのか物語は始まったばかりであった。

次回　3話へ続く

第3話　ママもプリキュアに変身します（前書き）

ラブとせつなの参戦です。家族４人揃ったプリキュアの活躍を是非見てください。

第3話　ママもプリキュアに変身します

今日は日曜日、この日はいつも家族と一緒に過ごす時間が多く、日曜日はラブは仕事が休みで休みの日は家で家族一緒に家事をしている。家の廊下の床で掃除機で綺麗にしながら吸い取っていくラブ。

「ふうー、廊下もだいたい綺麗になったかな？」と言いながら、廊下と階段の床の掃除を終えたラブは1階の向かった。

「ラブお疲れ様、掃除疲れたでしょ？」

「大丈夫、平気よ。」

「もうラブったら。」

「せつなの方こそ。」二人は仲良しぷっりの会話でラブラブで、娘達と一緒にソファーに座った。

「ラブママ、せつなママと家族４人で一緒に座るのも心地良いわ。」

「家族４人で一緒にいるのが一番だわ。」

「家族揃って座るのはママも落ち着くわ。」

「家族で揃うと幸せが感じるわ。」家族一緒に座ると４人は居心地よく気分が落ち着き、二人の母親と双子の娘は一緒にいると幸せを感じて、体を近くに寄らせた。

「気持ちいいわ。」

「こうしてお互いの体を近づけると何だか安らぎるわ。」

「ママもこうしているととっても癒されるわ。」

「家族が一緒になればなるほどみんなを愛しちゃうわ。」お互いの体を隣接させながら母子一緒に身体を隣接した状態で家族を深く愛し合うほどお互いを大切にする想いを寄せた。」それからお昼になって家族揃って一緒に昼食を取り、特に日曜日や休みの日などは特に家族と一緒に昼食を取る事が多い。

「いただきます。」夕食のようにいつも楽しい食事を取る４人。

「今日は私とアイもママ達と一緒にご飯を作ったわ。」

「家族でご飯作るのは楽しい事かな。」

「まあアイとマコトったら、二人ともラブママやせつなママの事が大好きなんだから。」

「ラブママの方こそ、可愛い娘達の事が大好きでしょ?」

「うふ、もう家族でラブラブ何だから。」

「家族全員もう愛し合っているわ。」家族でラブラブっぷりは食事の時も相変わらずで、家族が愛し合えば愛し合うほど仲が良い関係になる。

「今日は家族で作った簡単なパスタはおいしいわ。」

「家族４人揃って料理したり食べたりするのは楽しいわ。」

「そうね、こうして過ごすのも楽しいわ。」

「家族が一緒にいればとっても幸せな気分だわ。」

「家族は一緒にいるのが一番幸せかな。」家族全員揃って一緒にいるとお互い幸せな気分を感じて、この４人家族はお互いを愛し合ったり、家族一緒に協力しながら手を合わせたり母と子を大切に思いやる気持ちを持つ。食事が終えて夕食の買い物に出かけに行こうと家を出てスーパーマーケットへ一緒に向かった。

「今日の夕食は何にがいいかな？」

「あたしはオムライスがいい。」

「私はグラタンが良いわ。」夕食をそれぞれ自分の食べたいのを挙げていくアイとマコト。

「二人とまだ決まっていないから店に行っていろいろ見て決める事よ。」

「ええ～。」

「今夜の夕食はピーマンやニンジンも入るかもしれないよ～。」

「それだけはやめて～。」

「二人とも好き嫌いは言わないのよ。」

「わかったわ・・・・・。」

「ニンジン嫌い・・・・・。」夕食を難易するのか家族でいろいろと話し合いながら歩いていき、家族が今夜の夕食にいる材料をスーパーマーケットで見て決めていこうとした。一方、どこか別の異次元世界における場所で前回のプリキュアとの戦いでこの世界にプリキュアが出現した事を組織の首領に報告するガーレッド。

「プリキュアがこの世界においても現れたそうです。」

「プリキュア、あの伝説の戦士がここにも存在していたというのか。」

「はい、今回最初の行動がプリキュアに邪魔されたせいで台無しにされた。」

「ガーレッドよ、自分の失敗を他人に押しつけるでない。」

「ですがしかし・・・・・。」

「ワシの言う事が聞けないのか?」威厳の鋭い目つきでガーレッドをにらむヘルエビルの首領。

「ははっ、この作戦の失態は自分にあります。」

「よし、プリキュアを倒し再びミッドスターを征服するのだ。」

「了解であります。」こうして再びミッドスターへと向かってプリキュアを倒す事とミッドスターを征服する事を優先に目処においたガーレッド。その頃スーパーマーケットで店内で品物をいろいろと

見回る桃園一家。

「どれが良いのかな？」まずは野菜の方から見てどれが良いのか考えて、今夜の夕食に作る材料を決めようとしていた。

「にんじんだけは入れて欲しくないよ・・・・。」

「ピーマンも入れるとさすがに嫌になっちゃうから・・・・。」

「また好き嫌いを言っているわね。二人ともそんなに好き嫌い言うんならママが入れちゃうわよ。」

「やめて、もう言わないから。」

「そんなに好き嫌いばっかり言うとママ悲しんじゃうわ。」

「もうラブママったらやめてよ。」

「うふふ、アイやマコトも冗談通じないんだから。」

「もうちゃんとふざけないで決めてよ。」

「はいはい。」家族４人は店内の品物をよく見ながらよく工夫しながら考えており、だが家族４人で考えるのも結構時間がかかっていた。スーパーマーケット店内にてガーレッドが一般人に姿を身を隠してやってきた。

「この人間共はどうやら大勢いるみたいだな、この建物で何か騒がしいみたいだな。」スーパーマーケットの中を歩いて見ながら人が大勢いる事を気にかけていて、スーパーマーケット内で人が商品を

買ったりしているのを見るガーレッド。

「人間共はまったく何かを持って帰っているそうだな。」ガーレッドは人が商品を購入しながら出ていく姿を見ていた。

「イライラするな。」

「あのー、どうかなされたんですか？」スーパーマーケットの店員が不機嫌そうなガーレッドに声を掛けた。

「おい、貴様ここはなんて言うところだ？」

「ここですか、この店はお客様がご商品を買うところです。お客様は何を探しに求められますか？」

「ふざけた事を・・・・・。」

「えっ？」一般人の姿からヘルエビルの幹部としての姿へと変えて、服のポケットから不気味なカードを出してレジに投げつけた。

「出でよ、イライラー！！」レジに投げつけたカードはイライラーへと姿を変えて店内で暴れ始めた。その頃、夕食の材料をようやく集めてレジへ向かう桃園一家。

「これで夕食の材料も決まりね。」

「後は作るだけね。」

「きゃあー。」

「あれ、人が騒いでいるわ。」

「何かセールでもやっているのかしら？」

「気になるからとにかく行って見るしかないね。」人が突然遠くから騒いでいるのを見て、何故騒いでるのか気にかけて４人は様子見に行きはじめた。そこで人が騒いでいるのは何とイライラーが暴れていたのであった。

「イライラー！！」

「助けてー！！」

「あれはこの間現れた怪物だわ！」先日倒したばかりのイライラーが今度はスーパーマーケット内で現れるのを見たアイとマコト。

「知っているの？」

「私たちもわからないけど、けど公園で暴れたのと同じよ。」先日公園で戦った倒したイライラーも今回現れたのと同じと確認した。イライラーは４人の方にも襲いかかろうとしてきた。

「来るわよ！！」

「とにかく逃げる事だけ考えるわ！！」近づいてきたらイライラーから急いで走り出して逃げ出す４人。それを後ろから追って追尾するレジイライラー。

「イライラー！！」レジの入力ボタンから金銭型ミサイルをいくつか発射してきた。

「きゃあー！！」後ろから発射してきた金銭ミサイルの爆発で吹き飛ばされた４人。

「いた・・・・・・。」

「まずい来るわよ！！」後ろからレジイライラーが近づいて来ようとした。

「プリキュアに変身して戦うしかないわ。」

「そうね、とにかく変身するわ。」二人はリンクルンを取りだして、リンクルンにそれぞれの必要なピックルンが変身した鍵を刺した。それに反応し、カバーが開き、ボタンを押して、発光し始めた。

「チェンジ！プリキュア！ビートアップ！」光が満ちて、アイとマコトの２人はその光によって髪と服が一変し、髪は伸び、服はダンス衣装のようなドレスに身を包み、腰にリンクルンをかけた。

「勇気と愛のハート、キュアアップル！」

「優しさと幸せのハート、キュアチェリー！」

「フレッシュプリキュア！！」プリキュアに変身した二人は、レジイライラーに攻撃をしかかった。

「イライラー！！」レジの入力ボタンを押して金銭型ミサイルを発射してプリキュアに攻撃をした。

「はあっ、たぁっ！！」発射されてきた金銭型ミサイルを殴り払い、

またミサイルを掴んでレジイライラーに投げ返した。

「うわー！！」自分が発射したミサイルがプリキュアに投げ返されて逆にダメージをくらい、その隙にプリキュアはダメージを食らっている間に攻撃を仕掛けようとした。

「はあああっ！！」二人同時攻撃で間を挟んでレジイライラーに直接食らわせた。

「うわー！！」

「今日も順調よ。」

「早く終わらせて、すまさないと！」すぐにでもイライラーを片付けて家族一緒に夕食の支度をしていきたいと言う思いで倒そうとしている。

「そうはさせん！！」突然遠くから炎がキュアアップルとキュアチェリーの二人に向けられてきた。

「！！」すぐにその炎からかわした二人。

「どこから攻撃してきたの？！」

「この俺だっ！！」廊下の遠くからプリキュア達の近くにやってきたガーレッド。

「誰なの？！」

「貴方一体何者？！」

「俺か、俺の名はヘルエビルの幹部の一人ガーレッド！！小まずはこの世界を征服してそして全世界を我がエビルデッドのものにするのだ！！」プリキュアとエビルデッドの幹部がついに対面して、お互いの顔を初めて認識し、そして存在を確認した。

「そんな事はさせないわ！！」ガーレッドに殴りかかろうとするアップル。

「ふん！！」熱光線でアップルに向けて直接食らわせた。

「きゃあああっ！！」

「アップル！！」ガーレッドの熱光線を食らって倒れるアップル。

「ううううっ。」たれたアップルに直接殴りかかろうとしてくるガーレッド。

「ああっ！！」身体を横に転ばしながらガーレッドが繰り出そうとしてくる拳をかわしたが・・・。

「イライラー！！」レジイライラーは今度はレジから巨大なレジートを出して転んでいるアップルの身体に巻き付かせた。

「きゃああっ！！」レジイライラーに身動きを封じられてピンチに陥ったアップル。

「アップル！！」

「よそ見をするな！！」アップルの心配をしているチェリーにガー

レッドが直接拳で彼女に殴りかかった。

「あああああっ！！」ガーレッドの攻撃を食らって倒れるチェリー。倒れているチェリーにも巨大レシートを出してチェリーの身体に巻き付かせた。

「しまった、身体が！！」チェリーも身動きが封じられて、プリキュアはピンチに陥ってしまった。

「ハハハハハ、どうしてもう終わりか、プリキュアはこの程度だったのか？！」プリキュアを追い詰めて勝利の宣言と感じたガーレッド。

「二人まとめてとどめを刺してやる！！」雨後異を封じられたプリキュアにとどめを刺そうとするが・・・。

「そうはさせないわ！！」突然ラブとせつなの二人が、近くに現れた。

「何だ貴様は？！」

「ラブママ・・・・。」

「せつなママ・・・・。」

「私たちの子供をいじめるなんて母親として許さないわ？！」

「母親だと？！たわけた事をプリキュアでもない貴様ら二人に何が出来るんだ。」

「マラブママ。」

「せつなママ。」

「二人とも待ってて、ママ達も今から変身するから。」二人の母親は娘達と同じようにリンクルンを取りだして、リンクルンにそれぞれの必要なピックルンが変身した鍵を刺した。それに反応し、カバーが開き、ボタンを押して、発光し始めた。

「ん？」

「チェンジ！プリキュア！ビートアップ！」光が満ちて、ラブとせつなの二人の母親はその光によって髪と服が一変し、髪は伸び、服はダンス衣装のようなドレスに身を包み、腰にリンクルンをかけた。

「ピンクのハートは愛ある印、もぎたてフレッシュ、キュアピーチ！」キュアピーチに変身したラブ。

「真っ赤なハートは幸せの証、熟れたてフレッシュ、キュアパッション！」キュアパッションへと変身したせつな。

「フレッシュプリキュア！」再びプリキュアに変身した二人は、大人の姿として服や髪型も変わっていて、目の前にいる平和の浴び焼かす者を倒そうとした。

「プリキュアがまだいたというのか？！」

「そうよ、私達はかつて世界を救った伝説のプリキュアよ！！」これまで世界の危機を救った伝説プリキュアであると告げるピーチとパッション。

「今更現れて何をすると言うのだ！」

「私たちの娘をいじめてくれたわね、それに夕食の買い物を邪魔をするなんて貴方を許さないわ！！」

「ほざかしい、イライラーこいつらも始末しろ！」

「イライラー！！」二人のプリキュアにも巨大なレシートを出して、巻き付けようとしたが。

「はっ！！」

「たああっ！！」二人は拳で立ったの1発で敵の技を看破した。

「何、イライラーの技を受け止めただと？！」イライラーの技が簡単に破られたのをみて驚いたガーレッド。二人はそのままレジイライラーに同時攻撃を仕掛けようとした。

「ダブル・プリキュアパンチ！！」二人の繰り出す拳でレジイライラーに直撃を食らわて遠くへ吹き飛ばし、巨大レシートで身体を巻き付かれた二人の娘プリキュアをところへ向かって、二人の身体に巻き付いた巨大レシートを破った。

「二人とも大丈夫？」

「大丈夫よ。」

「私も平気よ、ママもプリキュアに変身したんだ。」

「当たり前よ、ママ達もこうみえてもプリキュア何だから。」
「可愛い娘を助ける為に二人のママがプリキュアに変身しちゃうんだから。」
「ママだってプリキュアに変身した姿は可愛いのよ。」
「年齢的にはそんなに・・・・・。」
「こら、まだママ達だって若いのよ。」
「人の歳は女に失礼よ。」
「姿が綺麗になったってところね。」娘に突っ込みれながらプリキュアに変身した母娘の会話もしたり、親子仲は相変わらずであった。
「喋っている暇があったら戦う事だな、イライラー！」
「イライラー！！」ガーレッドはレジイライラーを立ち上がらせて、４人揃ったプリキュアに襲わせようとしてきた。
「来るわよ！」
「わかっているわ。」
「じゃあ家族プリキュアの力を見せてあげるわ。」家族４人のプリキュアは各自で分散してレジイライラーの周りに散らばって行動を取り始めた。
「ええーい、４人がバラバラになったところでまとめて片付けてや

る、イライラー！！」レジの入力ボタンを押して中から金銭型ミサイルをいくつか発射してばらばらに分かれた４人の方に向けた。

「ええーい！」

「それっ！」発射してきた金銭型ミサイルを殴り落としたり、またミサイルを投げ返してレジイライラーの中に入れた。

「うわー！！」プリキュアに投げ返された攻撃が中に入れられてダメージを負った。

「よし今よ。」母子４人ははそれぞれ頭上で両手を叩いてから、左右の腰元に手をおき、　胸の前で両手を使ってハートの形を作った。

「悪いの悪いの飛んでいけ！！」

「プリキュア・ラブハート！！」

「プリキュア・ハピネスハート！！」

「プリキュア・ラブサンシャイン！！」

「プリキュアハピネスウェーブ！！」

「これが親子揃った力よ、プリキュアファミリーハート！！」それぞれのプリキュアから放つハート型の光線が同時にイライラーに向けた。

「イライ・・・スッキリー・・・・・。」プリキュアの放つ光線で敵は浄化され、元のレジに戻った。

「今度は二人も現れるとは、ええーい覚えていろ！！」この場からすぐに逃げ出すガーレッド。

「やったわ。」

「今日はママがプリキュアに変身したって言うのもめったにないわ。」

「あらそうかしら？」

「ママがプリキュアに変身した姿は美人だわ。」

「あら、ありがとう。二人のママの事はプリキュアの姿になっても大好き？」

「うん、ママの事は一番大好きよ。」

「ありがとう。」こうして一旦戦闘は終わり、自宅へ帰った。夕食の支度をして、家族４人で一緒に作った。今夜の夕食は家族４人で作った麻婆豆腐を食べる事になった。

「いただきます。」あつあつの麻婆豆腐を食べながら実感して、加増４人でＴくったご飯を味わって口にする。

「４人で作るとおいしいわ。」

「家族の味はおいしいわ。」

「辛くておいしいこの味はたまらないわ。」

「家族一緒に揃うとおいしくなるわ。」楽しい夕食を送りながら、笑顔で明るく食べながら過ごした。夕食が食べ終わった後は食器などを洗ったり、片付けたりし、そうしたら４人は一緒に部屋へ向かった。ベッドの上で寝ころんで今日の事を一緒に話したりする４人。

「今日は大変だったけど、家族揃ってプリキュアに変身して戦ったのがあたしは嬉しかったわ。」家族揃ってプリキュアに変身して戦った事が母親と一緒に悪い奴らと戦えて出来た事を喜ぶアイ。

「ママもアイやマコト達と一緒に揃って戦えたのは嬉しいわ。」

「家族４人でいると何かいろいろとね・・・・。」

「今日は体も疲れているみたいだからゆっくり休んで眠りましょう。」

「お休みなさい。」こうして４人は疲れた体を休んでぐっすり眠った。

次回　４話へ続く

第４話　黒と白の二人がやってきました（前書き）

今回はなぎさとほのかがゲスト出演します。新しい力が手に入ります。少しゴーカイディケイドっぽく感じで・・・・。

第４話　黒と白の二人がやってきました

行ってきます。」

「気をつけて行ってくるのよ。」家を出てそれぞれ仕事へ向かうラブ、学校へ通うアイとマコト。

「平日はよく一人っきりなっちゃうわ。さて、今日も１日精一杯頑張るわ。」せつなは平日は一人で自宅に過ごす事が多く、今日１日を精一杯頑張ってやり遂げて、主婦としての仕事を家の掃除や洗濯や買い物などをしたりする毎日を送るせつな。４人がそれぞれ１日を送る中ここミッドスターで、別世界からやってきた二人の女性がこの世界に踏み入れてやってきた。

「あの二人、この世界で写ってから暮らしてから何年経っているのかな。」

「もう１０年以上くらいじゃないのかしら？」

「結構経っているわ。あの二人は同じ女同士結婚して子供出来たって言うのもなんだか驚くほどあり得ないわ。」

「あの二人、子供を連れて私たちのいる世界によく遊びに着てきたから今度は私たちがあの二人のところに遊びに番よ。」

「ラブとせつなに会ったら驚かせようかな？」

「それ良いわ。」二人はなぜかラブとせつなの事を知っているように会話をし、ラブとせつなに会ったら驚かせようと考えるその二人。

この二人はラブとせつなの事を知っているようでその二人は古くから関係しているらしい。別次元の世界で、前回またプリキュアに破れた事でヘルエビル首領に大目玉を食らうガーレッド。

「ガーレッド、おまえは単に力押しでプリキュアに挑むだけでは勝てん！！」

「申し訳ございません、プリキュアがさらに二人も現れる事は予測していませんでした・・・・。」

「もういいおまえはしばらく休め、プリキュアごときにやられるとはおまえも情けない事だ。」

「はっ・・・・」デスエビル首領に叱られて首領の部屋から出て下を向いて歩いていくガーレッド。

「おのれプリキュア、またしても俺の邪魔ばかりするとは絶対に許さんぞ！！」プリキュアに破られた事で起こりながら八つ当たりを壁を殴った。

「あらあらそんなに怒ると女から嫌われてしまうですわ。」

「そなたは怒るのが激しすぎるそうじゃな。」そんな怒っているガーレッドの姿を見て近くやってきた同じ幹部のリーフィアとネクロースがやってきた。

「リーフィア、ネクロース、何をしにきた？！」

「プリキュアとか言う奴にやられて怒っている姿を見物しにきたのですわ。」

「何ぃっ！」

「あらあらまた怒っちゃうとお肌にも良くないですわ。」

「おぬしは少し休暇を取ると良い。」

「毎日厚化粧ばかりするリーフィアやいつも爺くさいネクロースに言われるまでもない！」

「あら、そうかしら？いつも細かい事で起こって八つ当たりしている人と一緒にしないでくださいですわ。」

「ワシはおぬしほどではないわ。」

「ええーい！！」壁をまた叩いて、二人の前から去るガーレッド。

「行っちゃいましたですわ。」

「ふっ、たわいのないのう。」

「今度はわたくしが出てプリキュアとか言う戦士をやっつけに行こうと考えているのですわ。」

「ほお、おぬしがか。」

「はい。」ミッドスターに現れたプリキュアを倒しに行こうかと露みようとするリーフィア。

「ついでに欲しい物も奪って私のコレクションにして持ち帰ろうか

と思っているのですわ。」

「おぬしは相変わらずも物欲激しいわい。」

「私は力づくでも手に入れて差し上げるのですわ、だから今から出かけてくるのですわ。。」プリキュアを倒しに行くと同時に欲しい物を奪ってコレクションにしようと出るリーフィア。一方、ミッドスターでは、ちょうど午後頃、せつなはスーパーマーケットから夕食を買い物を終えて、今から自宅へ戻る際であった。

「さて買い物も終えたし、後は家に帰るだけね。」道端をそのままっすぐ歩くせつな。左の道端から二人の女性が通りかかってきて、偶然そこで遭遇しようとした。

「♪。」それぞれの道端から通ってきた3人は知らないままぶつかろうとした。

「あっ！」

「きゃっ！」偶然部買ってしまった3人はそこである対面をする事になった。

「痛～、あ～、買い物袋から買った物が散らばったちゃったわ！」

「ごめんなさい、ぶつかっちゃたなら私も手伝いますわ。」

「ああ、ごめん。気をまずくしたんなら落ちたの手伝ってあげるから。」せつながスーパーマーケットで購入した商品が買い物袋から散らばってしまって、一緒に落ちたのを袋に入れ戻そうとする二人。この3人は、そこで顔合わせをする事になった。

「ありがとうございー・・・・・あっ！」

「あっ！」顔を合わせた二人は偶然知っているかのように顔と目を会わせようとした。

「あなたたち二人はもしかしてなぎさ、ほのか！！」

「もしかしてあなた、せつなじゃない？」偶然ぶつかってきた二人組はそうなんとアイマコトが欲プリキュアの事でよく名前が上げられてあのなぎさとほのかであった。かつてこの二人はラブとせつなと同じプリキュア・・・だが先にこの二人の方から初めてプリキュアに変身されて、プリキュアの始まりはこの二人がきっかけでもあった。なぎさは光の使者キュアブラック、ほのかは光の使者キュアホワイトにそれぞれ変身してドクツゾーンと戦ってきた。

「久しぶり。」

「そっちこそ久しぶりね。」かつての仲間同士、プリキュア同士の再会を果たす3人。

「どうして二人がこの世界に来たの？」

「あなたが昔住んでいた世界の科学を学んで別世界をいつでもいけれるように勉強して出来たのよ。」

「それをきっかけにラブとせつなのいる世界に行こうと思ったのよ。」

「ラビリンスの科学ね・・・・・。」

「こうして会えるのも案外珍しいかな？」

「ところでラブとアイちゃんとマコトちゃんははどうしているの？」

「ラブは今仕事中で、アイとマコトは学校よ。」

「そっか、じゃあこの3人が帰ってきたらあたし達がいる事を驚かせちゃおうかな。」

「なぎさったらもう相変わらず子供っぽいね。」

「ほのかも相変わらず突っ込むわ。」なぎさとほのかの二人も昔と変わらず、バカをするなぎさによくつっこみを入れるほのか。その頃ミッドスターへたどり着いたヘルエビルの幹部の人リーフィアは。

「ここがガーレッドが行った世界ですわね、そして伝説の戦士プリキュアがいるとおっしゃいたそうですわ。」ミッドスターの世界において彼女は目立った格好だといけないからガーレッドと同様に姿を変えて、レディーススーツを着用した格好で一般人と同じ姿になった。この世界を初めて踏みいる事で、歩きながら回った。

「ふーん、この世界はまだ何かいろいろあるそうだからいろいろ見て回らせていただきますわ。」ミッドスターの世界についていろいろと詳しく見て回って行こうとするリーフィア。一方、なぎさとほのかがやってきた事で自宅へ帰宅したアイとマコトとラブ。

「久しぶりね、ラブ、アイちゃんとマコトちゃん。」

「なぎささんやほのかさんもお久しぶりです。」

「なぎささんやほのかさんが、こっちの世界へ来たって驚きです。」
「あら、そうかしら？ラビリンスの科学を私がいろいろと研究して自分達でも異世界を行けるようにしたのよ。」
「ほのかさん、さすがだね。研究とかいつも毎回やったりしているみたいだから。」
「私もそれを研究して調べるのも結構大変だったのよ。」
「私の住んでいる方は科学とかがもう遠いほど先に進んでいるからわ・・・・・。」
「それよりせっかく来たんだから何か違う事とかしない？」
「せっかく来たんだから何か話しているだけじゃなくてせっかくだから一緒に何かその・・・・・。」
「アイ。」
「ラブ、せっかくだからちょうど何か一緒に外食したり、遊んだりするとか？」
「せっかく遊びに来たんだから楽しく過ごしたいわ。」
「なぎさとほのかの二人が来たんだから、同じプリキュア同士６人で何か一緒にしたりしましょう。」
「そうね、じゃあ幸せゲットするよ！」

「私も幸せ掴むんだから！」

「一生懸命負けないくらいやるわ。」決め台詞を言って、同じプリキュア同士６人で一緒に揃って出かけて、街へ出かけた。ミッドスターの街において、桃園一家はなぎさとほのかと一緒にこの心星町で有名な博物館を入ってそこでミッドスターの世界における様々な物などが展示されていた。

「綺麗な銅像だわ～。」

「この世界にこんなのも展示されてるんだね、それに私たちのいる世界に近い物もあるんだわ。」

「そうかしら？この世界は少しラブ達が暮らしていた世界とあんまり変わっていないのよ、似た世界ってところかしら？」

「ミッドスターは私たちのいる世界とほとんど変わらないわね。」

「でも街とかは少し近未来風って感じかな。」

「ラビリンスの街に少し近いのもあるわね。」

「歴史的な物はこの世界の方が多いから、この世界の歴史的な物がいっぱいあるのよ。この町も代々からあるものがこの町で飾られているのよ。」

「へぇ、心星町にも古い物があるんだ。」

「どういうのが見てみたいわ。」

「じゃあ案内してあげるね。」心星の代々からあるものが街で飾られているをのなぎさとほのかに連れて案内した。それを聞いた一般人に変装した状態のリーフィアは、それを自分ものにしようと企んだ。

「この町のお宝、なんだか欲しくなってしまったですわ。どういう物かこの方々の後を追って参りますです。」博物館から出ようとするラブ達の後を尾行して気づかれないように追った。それから博物館から出て、桃園一家はようやく心星町にある古くからおいてあるものを二人に紹介させた。

「これがこの町の代々から伝わるもの？」

「この大きな樹は１０００年前からあった樹で、この街の人達はこの樹をいつも大切にしているのよ。」

「あたし達も家族一緒に年に何回かこの樹にお参りしたりしているのよ。」

「この樹がこの町の人達二都っての宝物よ。」

「へぇ、そうなんだ。」

「いつも大切に愛されているか。」心星町に古くから代々あったのは大きな樹であった。この樹は町の人からいつも大切に愛されて続けて、この町をいつも支えているような感じをして、またこの町の象徴でもある。

「みんな、大切にしているんだね。」

「どの世界でも似たような事は大切にされ続けている。」

「そうね、みんなに大切に愛されてこそ本当に宝物なんだね。」どの世界でもその樹と同じように人々から大切に愛され続けて、まさにそれこそ本当にある意味宝物とも言えるべき存在でもあった。

「何が宝物ですって！！」６人の会話を聞いてこの町の宝物がこの樹である事でイライラして近くにやってきたリーフェア。

「誰なの？」

「宝者がこんなダサイ樹なんてもう怒れたですわ！」

「ちょっと何よ、人の話している最中に割り込まないでよ、おばさん！」

「おばさん？！」よくもこの私の事をオバサンを呼んでくれているんじゃないわよ！！」アイにおばさんと呼ばれてかっとなって怒り出して、ヘルエビルの姿に変身した。彼女の姿は髪型が巨大なポニーテールと緑色のコットンドレスが特徴である。

「聞け、我が名はヘルエビルの幹部に一人、リーフィア！欲しいは力づく奪ってあげるのですわ！」ガーレッドと同様にヘルエビルの幹部として名乗りを上げた。

「あなたもあのガーレッドと同じ仲間の奴ね？」

「そうですわ、でもあんな暑苦しい奴と一緒にしないでくださいですわ！この私を怒らせた事を公開してあげるですわ、出よイライラ

ー！！」不気味なカードを取りだして、偶然地面に落ちていたゲタに取り付けてイライラーを出現させた。

「イライラー！」

「イライラー、こいつらをまとめてしまうのですわ！」ゲタイライラーはアイ達襲いかかろうとした。

「来るわよ。」

「うん。」

「わかっているわ！」

「４人で変身するわ。」４人はリンクルンを取りだして、リンクルンにそれぞれの必要なピックルンが変身した鍵を刺した。それに反応し、カバーが開き、ボタンを押して、発光し始めた。

「チェンジ！プリキュア！ビートアップ！」光が満ちて、母子４はその光によって髪と服が一変し、髪は伸び、服はダンス衣装のようなドレスに身を包み、腰にリンクルンをかけた。

「勇気と愛のハート、キュアアップル！」

「優しさと幸せのハート、キュアチェリー！」

「ピンクのハートは愛ある印、もぎたてフレッシュ、キュアピーチ！」キュアピーチに変身したラブ。

「真っ赤なハートは幸せの証、熟れたてフレッシュ、キュアパッシ

ョン！」キュアパッションへと変身したせつな。

「フレッシュプリキュア！」家族揃ってプリキュアに変身した姿を見て、あれがアイとマコトがプリキュアに変身した姿を一目で見たなぎさとほのか。

「あの二人がプリキュアに。」

「あの子達もプリキュアになったんだね。」

「あの二人の娘なら私たちの力を託せるかもしれないわ。」二人がプリキュアに変身して戦う姿を見て、自分達の力を託せるのではないかとそう信じるなぎさとほのか。樹の周りで暴れているゲタイライラーを倒しにかかった。パンチで殴りかかろうとするプリキュアに身体をまっすぐに直面して攻撃を防いだ。

「あっ！」ゲタイライラーの防御姿勢で攻撃が防がれて、吹き飛ばされた。

「このイライラー攻撃を防ぐを持っているわ。」

「正面がだめなら足下や後ろを狙うしかないわ。」ゲタイライラーは正面から攻撃を防ぐ力を持ち、あらゆる攻撃を正面からまっすぐに防いでしまう。正面がだめであれば足下と後ろを狙って攻撃行動を変えた。

「えい！」後ろから背後を強く蹴るキュアアップルとキュアチェリー。

「はああっ！」両脚をサイドを挟んで攻撃して、ゲタイライラーの

体を倒させるピーチとパッション。

「イライラー！！」だが、身体をそのまま立ち上げて再び姿勢を戻した。

「えっ？！」

「転ばしてもだめなの？！」

「オーホホホホホ、わたくしのイライラーは力押しのガーレッドとは全く違うのですわ。」

「このままじゃ埒が明かないわ。」

「見てても退屈ですから私もお邪魔させてもらいますわ。」ゲタイライラーのその強さで苦戦を強いられ、さらにリーフィアが戦闘介入をして４人に襲いかかってきた。

「これでも食らいなさい！」扇子を出して風を引き起こしてプリキュアに向けた。

「きゃあああっ！」

「うふ、イライラー。」

「イライラー！！」リーフィアが風で引き起こしているその隙にゲタイライラーが４人の上に飛びかかろうとした。

「わああっ！」ゲタイリラーに踏みつぶされる寸前に、間一髪のところ急いで身体を転がして攻撃をかわした。

「あの風を起こしている方はママが何とかするわ、あなたたち二人はイライラーを倒すのよ。」

「わかったわ、私とチェリーでイライラーを何とかするわ！」

「ママ達はそっちに方を任せるね。」アップルとチェリーはイライラーの方を任せて、ピーチとパッションはリーフィアの方を任せて、それぞれ分断して分かれて戦う事にした。

「ん？」

「あなたの相手は私たちよ。」

「あら、お二人が挑みにされるというのですか。いいですわ、私と勝負させてもらいます！」リーフィアは二人のプリキュアを相手に扇子を構えた状態で腕を広げた姿勢を取り、足をジャンプして扇子から風を放った。扇子から来る風の方向を2立てに分かれてそれぞれの方向にかわして、背後から同時攻撃を仕掛けようとした。

「！！」扇子で二人のプリキュアの同時攻撃を一瞬で見抜いて扇子で防いだ。

「やるわね。」

「そちらもなかなかですわ。」

「でも感心している場合じゃないわね。」キュアピーチは拳で思いっきり右ストレートしてリーフィアの身体に食らわせた。

「くっ。」ピーチのパンチを食らいつつ、戦う姿勢を崩さずに取った。ゲタイライラーとやり合うアップルとチェリー。二人が攻撃してくるのを予測して真っ正面に一直線に立った。

「また攻撃が防がれたわ。」

「これじゃきりがないわ！」敵はさらに自分達の攻撃してくるのを予測して来るのを察知して、二人のプリキュアのパターンをお見通し来るので、かなりの強敵とも言える存在だった。

「落ち着いて、アップル。今私たち二人が何とかしないとイライラーを倒せないわ。」

「わかっているは、でもどうしたらやっつけれるのかわからないわ。」

「二人で一緒に力を合わせてやればきっと倒せるかもしれないわ。」

「そうよ、二人で一緒なら勝てるかもしれないわ。」二人は互いに手と手を合わせて一緒に力を合わせて戦って勝つ事を決めて、二人一緒にゲタイライラーに挑んだ。

「イライラー！！」再び二人の攻撃パターンを予測して、今度は体を横に倒して二人をつぶしかかろうとした。二人は両腕を上げて倒れてくるゲタイライラーを持ち上げて、持ち上げた際に蹴りを繰り出した。

「はあああっ！！」イライラーを蹴り飛ばして、倒れてくる際に防御姿勢が出来ない事見抜いた二人。

「あいつは倒れてくると防御が出来なくなるんだわ。」

「あいつに弱点があったんなら必ず倒せるわ！」敵の弱点を見抜いた二人。倒れてくるのと防御が出来なくなる事で二人はその弱点を利用して倒そうとした。

「弱点がわかればこっちが有利よ！」

「二人でいきましょう。」

「うん。」二人は再び一緒になってお互いに連携を取り合って、ゲタイライラーに挑んだ。そんな二人の戦う姿を見守るなぎさとほのかの二人。

「あの子達が互いに手をやり合って戦っているわ。」

「お互いに敵を倒すというその強い気持ちが一致してあの子達を強くしているのよ。」

「昔の私たち同じよ。」二人がお互いに手とやり合ったり、その気持ちが一致した時、その強さを発揮するのを見て昔の自分達を思い出す二人。二人のプリキュアはゲタイライラの間を挟んで蹴りを繰り出したり、また上のひもを掴んでそのまま持ち上げて地面に思いっきりぶつけた。

「はあああっ！！」

「イライラー！！」二人に持ち上げられて地面にぶつけられたゲタイライラー。

「やったわ。」

「これなら勝てるわ。」お互いに手をやり合って、二人に力を合わせて戦えば勝てるとそう信じたアップルとチェリー。そんな中二人の戦いを見て近くにやってきたなぎさとほのか。

「なぎささん！」

「ほのかさん！」

「あなたたち二人の戦いを見せてもらったわ。」

「お互いに手と手を合わせて共に協力し合って、互いの気持ちが一致し合う姿を見せてもらったわ。」

「あなたたち二人ならきっと出来るわ、そして二人の母親とさらに一緒になればさらに力も発揮するわ。」

「私たちがですか？」

「そうよ、私たち光の戦士の力を授けるわ。」

「えっ？」

「私たちがなぎささんとほのかさんの力を？」

「そうよ、あなた達二人のプリキュアならきっと私たちの力をうまく使いこなせるって信じているわ。」

「受け取りなさい。」なぎさとほのかから光が現れて、その光がア

ップルとチェリーに写り、その光が二人に輝きはじめた。

「あああっ。」輝いた光はアップルの右腕、チェリーの左腕にリボンの着いたブレス型を装着された。

「マックスブレス。」アップルとチェリーに装着されたブレス型はマックスブレスと呼ばれた。

「いくよ、チェリー。」

「アップルもいくわよ。」キュアブラックとキュワホワイトの授けられた力を二人のプリキュアが手を取り合い、合わせた手をゲタイライラーに向けた。

「プリキュアの美しき魂が！」

「邪悪な心を打ち砕く！」

「アップルサンダー！」

「チェリーサンダー！」それぞれのプリキュアが、桃色の雷を召還したアップル、赤色の雷を召還したチェリーが同時に放たれる事で二つの雷を合体させた。

「プリキュア・マーブル・スクリュー・フレッシュっ！」組み合わせた2種類の雷は螺旋状の雷撃　を生み出され、ゲタイライラーに放った。

「イライ・・・スッキリー・・・・・。」二人のプリキュアによる技によって浄化されて、元のゲタに戻った。

「くぅ、これがプリキュアの力と言うのですわね。今日はこの暮らしにして差し上げますわ！」ピーチとパッションの二人と交戦しているリーフィアはイライラーが倒されて、プリキュアの力を知ってこの場から退いた。

「やったわ。」

「私たち二人が力を合わせて戦って勝ったのよ。」ブラックとホワイトのその力を授かった事でお互い二人が手を合わせて、共に協力してお互いの気持ちを一致した事で勝てたのであった。

「二人とも勝ったんだね。」

「そうみたいね。」無事戦津も終わり、ようやく元の姿に戻って４人は再びなぎさとほのかを連れて一緒に町を回ったりしようとしたんであったが・・・・。

「えっ、もう帰るんですか？」

「今日は博物館やこの町の大切な宝物を見ただけでも十分だったわ。」

「でもそれで楽しく十分に楽しめたわ。」

「また今度来たときはいろいろと紹介させてね。」

「なぎささんやほのかさんもまたいつでも遊びに来てくださいね。」

「二人もも気をつけて帰ってね。」

「うん、みんなにあなたたちの活躍した事を伝えるわ。」こうして桃園一家と別れて、元の世界へと帰る二人。

「あの二人ならきっと頑張れるのかな？」

「もちろん頑張れると思うわ、二人がお互いを手をあせてやり合って、そして今度は家族４人が揃って力を合わせれば絆が深く高まっていくわ。」

「そうだね、せっかくあたし達から授かった力を無事頑張れるといいわね。」

「そうね。」

次回　５話へ続く

第5話　アイは勉強が大の苦手?！（前書き）

今回はアイは勉強が苦手という設定を、勉強で悪戦したりする話です。

第5話　アイは勉強が大の苦手？！

アイとマコトはいつものように学校へ登校して歩きながら会話をしていた。

「ふあ～、学校で出される宿題は毎日ばかりだよ。」

「仕方ないよ、学校の授業はいつも毎日宿題ばかり出されているからよ。」

「毎日宿題ばっかりでおまけに先生からまた宿題追加で出されるわ。」

「あら、宿題やるのをさぼってテレビ見ていたりしているからよ。」

「だって宿題やるのが面倒だもん。」

「またさぼったりしているとまた先生から余分に出されるわ。」

「ひぇ、それだけは勘弁して。」

「今日、ラブママとせつなママが大目に見てくれるからしっかり宿題やるのよ。」

「えええー、一緒に・・・・。」

「二人のママがしっかり見てもらえるだけありがたく思うのよ。」

学校の宿題をさぼるアイにマコトがラブとせつなの二人の母親が今夜宿題を大目にに見てもらうよう提案するマコト。学校へ到着して

いつものように学校生活を送る二人。数学の授業で方程式を生徒達に教えて、この解き方を説明していく。

「（方程式ねぇ、これも毎回面倒だわ。）」授業中に退屈そうな姿をするアイ。

「（勉強なんかいやだわ。）」

「ではこの問題を解ける人はいないか？」方程式の問題を解ける生徒がいないか声を出す数学の教師。方程式を解ける生徒は誰も手を挙げずにいた。

「じゃあ、先生が指定した人からこの方程式を解くんだぞ、アイ。」数学の教師はアイにこの問題を解くように指定した。

「えっ、私がですか？」

「アイ、この問題は解けるか？」黒板で書かれた方程式の問題を解くように言われたが、アイは方程式の問題を解くのがわからなかった。

「（どうしよう、この問題どう解いたらいいのかわからないよ。ああ～、どうしたらいいんだ。）」心の中で方程式の問題が解くのはどうしたらいいのか考え込み、考えている中でなかなか答えが出ずそのまま時間が数分進もうとした。

「わからないよー！！」式を解く事が出来ずにわからないと思わず叫んでしまった。

「先生、私が解きます！」

「マコト、すまないアイの変わりに解いてくれ。」

「はい、３ｘ＋６＝２ｘ＋８・・・・３ｘ－２ｘ＝－６＋８・・・・答えはｘ＝２です。」方程式を解いてすぐにやり方と答えを出した。数学の授業が終わって、アイは机の上に顔を乗せて、マコトに数学の問題を簡単に解かれてしまって同じ双子でありながら問題を解かれた事で自分が恥ずかしい気持ちでいた。。

「マコトに解かれて、恥ずかしい気持ちになったわ、はあー。」

「こんなところで何しているんだ?」アイの近くに同じクラスメイトの男子の堺がやってきた。

「ちょっとさっきの問題の事で考え込んでいたのよ。マコトに問題解かれちゃってちょっと落ち込んでいるってと頃かな。」

「何そんなの事で落ち込んでいるんだ、勉強すればこんな問題解けるだろ。」

「あたし、勉強苦手ぇ・・・・。」

「おまえそれだからいつもテストで毎回赤点取るんだよ。」

「だって、勉強嫌いだもん。」

「はあ、おまえっていつも勉強の時はいつもこうなんだな。」

「アイったらまたあーだこうだっただだこねないのよ。」二人が話している間にマコトが近くやってきた。

「マコト。」

「アイったらやっぱりママ達に勉強教えてもらわないとだめかしら。」

「ママに教えてもらうのは恥ずかしいよ。」

「いつもママに甘えているくせに勉強だけは別ね。」

「だって勉強は苦手だもん。」

「それじゃだめよ、いつまで苦手のままだと宿題が毎日重なるわよ。」

「げっ！」マコトの口から出た発言でぞっと固まった状態になったアイは勉強が苦手でさらに日頃から宿題をさぼっていて、さぼった分から宿題が増えていく地獄であった。

「あらどうしちゃったのじっと固まっちゃって、もしかして宿題が増えるのが怖いかしら？」

「うるさいわ、ママに見てもらえばいいんでしょ？！」

「そうね、じゃあ今夜家族でお勉強で。」アイは二人の母親から勉強を克服する為に嫌々でありながら見てもらう事に決めた。それから時間はかなり経って夜になった。早速家族一緒の部屋で二人の母親から勉強を教えてもらう事になったアイは苦手な勉強を克服する為に努力してやる事に決めた。

「アイ、早速苦手な勉強を克服する為にもママ達が見てあげるわ。」

「二人のママの特別授業は厳しいからしっか出された事をよく覚えるのよ。」

「はあーい。」

「じゃあ早速特別授業を始めるわ。」早速ラブとせつなの二人の母親のによる特別授業が行われた。まずはラブがてアイに英語の問題から出した。

「まずは英語の勉強からよ。単語の発音や単語を翻訳する事よから教えるわ。」英語の単語を翻訳、発音から教えていく事で、娘のために母親はしっかり勉強を教え込ませようと居合いが入った。まずは単語の発音から覚える事になり、ラジカセを用意して流れてくる英語の単語をしっかり発音して覚える事になった。

「まず始めに単語から始めるわ、ラジカセから流れてくるのをよく覚えるのよ。流れたら一旦切って、ママが流れたタンゴを発音するからそれもよく覚えて、覚えたらちゃんと発音するのよ。じゃあ始めるわ。」さっそくラジカセを流して、流れてくる英語の単語をしっかり暗記したりする事で、また流れたら一旦ラジカセを切って、母ラブが流れたタンゴを発音してそれも暗記して覚える事になり、覚えた暗記を自分でしっかり発音しないのであった。まずはラジカセ流れてくる英語をしっかり暗記して聞き取り、流れてきた英語を頭の中にしっかり詰め込もうとした。

「じゃあ切るわ。」ラジカセを一旦切って、流れてきた単語をラブが口で発音しようとした。

「ｃａｒｅｆｕ、ｌｉｂｅｒｔｙ、ｇｒａｔｉｔｕｄｅ、ｅｘｃｅｐｔ、ｂａｋｅ、ｔｒａｎｓｉｅｎｔ、ｔｅａｃｈ・・・・・ｇｌｏｖｅ、ｃｏａｔ、ｍｏｏｎ・・・・。」ラブは英単語をスラスラ発音して全部の単語を言った。

「すごい・・・。」

「アイ、今度はあなたが覚えるのよ。」

「うう・・・。」深刻な表情をして英単語を発音しようとするアイ。

「ｃａｒｅｆｕ、ｌｉｂｅｒｔｙ・・・・ｔｒａｎｓｉｅｎｔ・・・。」ラジカセで流れた英単語や母ラブが口にして出した単語をちゃんと発音して、英単語をすらすら口にして発音していくアイ。苦手な勉強を一生懸命ちゃんと取り組んでやっていき、続いて英単語の翻訳もやる事になり、ラブがいろいろとアドバイスされながらしっかり勉強しながら覚えていき、英語の翻訳を辞書で開いたりして意味を調べたりした。

「出来るわね、ちゃんと勉強すれば英語も覚えるはずよ。勉強を日頃から怠けずにすることよ。」

「はい。」

「じゃあ次はせつなママからの勉強よ。少し厳しいから甘くはないわ。」もう一人の母せつなが次の勉強レッスンを受ける事になり、せつなの出す問題は理科であった。だが理科の勉強はアイの一番苦手な分野でもあった。せつなが理科の説明をして化学反応式について詳しく失明するにもかからず、アイは理科の問題の説明を理解できず、頭の中が混乱し始めた。

「ああ、もうわかんないよ！こんなの解けないわ！理科なんて無理よ！」理科の問題でわからなくてわめいて叫びだしたが、母せつなが説明中にうるさくされてアイの額を強くつねった。

「痛い！」

「静かにしなさい！」せつなはアイに厳しく一括し、アイを大人しくさせた。そのままレッスンは続行して理科の説明を聞いて、説明が終えたら問題を受けて、よく読んでもやっぱり問題か解けず、頭の中が理解出来ずにいた。

「読んでも読んでもわからないわ、これじゃわからないわ。」問題を解けずに焦りだし、化学反応式の問題がどういう組み合わせで出来ているのか全く理解できずにいた。そのまま時間が経つ中未だに1問も解けずにいた。

「やっぱりわかんないよ～。」さっぱり問題を解けずに焦るアイ。とうとう時間が切れてせつなは1問も解けなかったアイにまた厳しくした。

「アイ！理科の問題が1問も解けないなんてこれじゃだめでしょ！」

「はっ、はい・・・・。」

「解けなかった罰としてしばらくの間おやつを抜きにするわ！」

「ええっ、そんなー！！」

「そんなんじゃないわ、あなたが勉強を克服するまでおやつは抜き

よ！」母親としてアイに厳しく指導して問題が解けなかった罰としておやつ抜きにした。そして翌日、日が暮れる頃、学校の放課後クラスのみんなと一緒に歩いていくアイとマコト。

「アイちゃん、せつなお母さんに厳しくされたんだ。」

「アイはそんな事でおふくろに叱られるから中身がまだ幼稚なんじゃねぇ？」

「アイちゃんったらまだ幼いところがあるよね。」

「アイったら毎日叱られていたりして。」堺と由樹と美佳がアイが母親のせつなに叱られた事で遊び半分でアイをからかった。

「私はそんなんじゃないから、それに勉強の時だけはせつなママは厳しくされるから。」

「アイったらママ二人を怒らせるともっと怖いかも。」

「ちょっとっ！」アイはみんなにからかわれて顔が赤くなって照れた。偶然道端で一人で歩くリーフィア。

「さて、今日も何かお気に入りの物を探しにいくのですわ♪先日は痛い目に遭わされたのですわ、もうイライラしちゃうですわ。」先日、新しい力を授かったアップルとチェリーの戦闘で敗れた事で気分を快適にする為にミッドスターに来て自分に気に入る物を探して回る1日を送るとした。だが道角の横からアイとマコトが通ってきて来ようとした。

「おやつ抜き・・・。」

「勉強やればしっかり大丈夫よ、今夜ちゃんとしっかりやっていればそのうち罰も取り消せれるよ。」偶然この道から通り越してきた3人はまた会う羽目になった。

「あっ。」

「あっ。」

「あっ。」

「どうしてあなた方ここにいるのですか?!」

「そっちこそどうして?!」

「二人ともそのおばさんと知り合い?」美佳が思わずリーフィアにおばさんとと呼んで突っ込み・・・・。

「おばさん・・・?!このわたくしがおばさんってよくも言ってくれ点者ねぇぞクソガキがぁっ!!」おばさんと呼ばれて切れだしたリーフィアは幹部の姿の変身して、周りにいるアイ達に襲いかかろうとした。

「ふん!!」扇子を右ストレートで振って風を起こしてアイ達を吹き飛ばした。

「きゃあああっ!」

「うわあああっ!」リーフィアに吹き飛ばされて地面に突き落とされたアイ達。

「オーホッホッホッホっ、このわたくしにおばさんと呼んだ事を後悔するのですわ。」

「痛いじゃないの、このババア！！」

「ババアだと？！もう許さなねぇぞごらぁ！！出よ、イライラー！！」不気味なカードを取り出してアイ鞄の中から落ちていた数学の教科書に取り付けた。

「出よ、イライラー！！」とりついたイライターは教科書イライラーとなって周りを暴れ始めた。

「イライラー！！」

「うわああっ、逃げろ！！」教科書イライラーから逃げ回るアイ達5人。

「こんな時にイライラーだ何て。」

「これじゃきりがないわ！」

「どうするんだよ！」

「何とかしてよ！」必死で逃げ回って走り出して、道角あちこち通って通って逃げ回っていくが・・・。

「イライラー！！」教科書からページを3枚飛び出して、飛び出たページは折り紙のように形を変えて折り鶴に変形して、空から飛んで襲いかかってきた。

「うわあっ！！」教科書イライラーが放った折り鶴ページのくちばしが来て、一同は一斉にしゃがんだ。

「これではすまされないわですわ、イライラー！」

「イライラー！」３羽の折り鶴と共に一斉に襲いかかろうとしてきた。このままではいつみんなに危害を及ばせてしまう事があると感じたアイとマコトは二人はある考えを乗り出してきた。

「襲うんならあたし達二人に襲いなさい！」

「あら？」アイとマコトが目の前になって現れた。

「堺、由樹と美佳と一緒に逃げて。」

「どうしてだ？」

「アイちゃん、マコトちゃん。」

「二人はどうするの？」

「私とアイは後から逃げるからその間に逃げて。」

「でも化け物に二人に何かもし万が一の事があれば・・・！」

「わかっているわ、あたしとマコトが隙を突いている間に逃げて！」

堺、由樹、美佳にイライラーを自分達二人がおびき寄せている隙にすぐに逃げるように言うアイとマコト。

「さあどうしたのですわ、そんなにしに肉のであるのですわ？」

「おばさん、顔厚化粧で暑苦しいわ！」マコトはリーフィアの厚化粧の顔を利用してさらにおばさんと発言して挑発させた。

「おばさん！！わたくしの顔が暑苦しいですって？！」

「そうじゃん、誰から見ても厚保化粧の塊で出来た顔なんか綺麗じゃないわ、おばさん！」

「えええーい、もう怒ったぞ！覚悟しとけよ、クソガキがぁ！」自分の顔の事をバカにされた事とおばさんとまた呼ばれて再びに切れ始めて二人に襲いかかろうとした。

「3人とも、今のうちに逃げて！」

「わかったわ！」

「そっちも気をつけるのよ！」

「二人とも生きて帰ってこいよ。」

「わかったわ！」二人は襲いかかってくる教科書イライラーから3人をこの場から離れて走って鬼ごっこの鬼から逃げ回るように走り回った。

「イライラー、こいつらを始末しろっ！」

「イライラー！！」3羽の折り鶴ページをとばしてウタリの後ろに襲いかかろうとした。

「後ろから来るわよ！」二人は後ろから3羽の折り鶴ページの奇襲を前を向いて横にかわした。

「やるじゃないの？だが遊びはここまでだ！」教科書イライラーがページを開いて二人を挟もうと襲いかかってきた。

「変身するよ。」

「うん。」　二人はリンクルンを取りだして、リンクルンにそれぞれの必要なピックルンが変身した鍵を刺した。それに反応し、カバーが開き、ボタンを押して、発光し始めた。

「チェンジ！プリキュア！ビートアップ！」光が満ちて、アイとマコトの2人はその光によって髪と服が一変し、髪は伸び、服はダンス衣装のようなドレスに身を包み、腰にリンクルンをかけた。

「勇気と愛のハート、キュアアップル！」

「優しさと幸せのハート、キュアチェリー！」

「フレッシュプリキュア！！」プリキュアに変身した二人。教科書のページから左右から挟んで間を攻撃して教科書イライラーにダメージを与えて青の会いDから離れた二人のプリキュア。

「プリキュア、この邪魔なガキ共消え失せろ！」3羽の折り鶴ページで二人に特攻させようとするが、

「こんなのへっちゃらよ！」近づいてくる3羽の折り鶴ページを殴って蹴り飛ばして、攻撃をし終えたらそのまま折り鶴ページを掴ん

で、リーフィアと教科書イライラーに投げた。

「えっ、きゃあああっ！」プリキュアに投げつけられた折り鶴にぶつかり、もう1羽折り鶴ページによってぶつかって教科書イライラーが倒れて来ようとした。

「きゃあああっ！」倒れた教科書イライラーによって下敷きになって身動きがでいなくなったリーフィア。

「あっ、リーファア、下敷きにされちゃったわ。」

「あのおばさん、なんだかんだでおもしろいのよ。」

「許さんぞ、クソガキ共が！このリーフィア様におばさんと3回も言わせてくれた事を後悔させてやるわ！やれ、イライラー！」3度もおばさんと言われて怒りの頂点に到達して、怒り心頭にリーフィアは本気を出した。倒れた教科書イライラーはすぐに立ち上がってページをたくさん飛び出して人型の折り紙に変形させた。

「げっ、何この数？！」

「どうなっているのよ？！」教科書イライラーによって出された多くの折人間ページ。たくさんの数を利用して一気にプリキュアに襲いかかろうとしてきた。

「わああっ、こんな数の相手苦手。数学と同じだー！！」

「アップル、落ち着いて。数が多くても考えて倒せば行くと思うわ。」

「無理だよ、あたし数学苦手でわかんないよ～！」

「戦いでもいちいち勉強の事取り上げないのよ！」

「だってー。」教科書イライラーから現れた折人間ページの群れで自分の苦手な数学と同じで混乱し始めたアップル。襲ってくる折人間ページを1体1体ずつやっつけていくが、

「ああ、だめ。こんな数の相手じゃ無理ー！」

「アップルしっかりして！」アップルにとって数は数学だと思い込んでおり、敵の数の多さで頭の中が混乱して全く戦う事が出来ずに煩労した。後ろから折人間ページが４匹襲いかかろうとしてきた。

「はああっ！」横からピーチとパッションが蹴りで間一髪のところ救われた。

「間に合ったわ。」

「ママ！」

「帰りが遅いと思ったらヘルエビルと戦っていたのね。」

「ピーチママはもう仕事終わったの？」

「もちろんよ、仕事ならもうすぐに終わったよ。」

「それよりこの数を何とかしない事ね。」大量にいる折人間ページの群れをどう対処して戦うか考える４人のプリキュア。

「数学みたいに戦うのはどお？」

「ええっ、ここで数学？１」

「戦って数学をするのよ。」

「戦って？！」

「簡単よ。」戦いながら数学をしてやる事で、母親プリキュアはそのお手本を見せる為に近くに襲いかかろうとしてきた折人間ページが左右に３匹ずつ分かれてやってきた。

「３＋３＝・・・。」

「６！」左右から３匹ずつ近づいてきた折人間ページをまとめて左右から来た数は３＋３＝６と計算してまとめて殴り飛ばした。

「こんな事も出来るんだ。」

「そうよ、家族揃って一緒にやればすぐにでも終われるわ。」

「アップル、チェリー、あなたたち二人が持っているマックスブレスを家族４人揃って使う事は出来るかしら？」

「そう言えばなぎささんやほのかさんもママ二人が一緒にいれば力はさらに増すって。」

「とにかくやってみるのよ。」マックスブレスを家族一緒に揃えばさらに力が増していく事で、アップルとチェリーは母親のピーチとパッションにその力を家族全員で一緒に使う事を決めて、光を輝く

させてマックスブレスを４ン分を出現させた。

「あっ。」

「あっ。」ピーチとパッションもアップルとチェリーと同じように輝いた光からマックスブレスが装着されて、ピーチはアップルと同じ右手で装着され、またパッションはチェリーと同じ左手に装着された。家族４人揃って装着されたマックスブレスを今ここで見せる時が来た。

「いくよ、チェリー、ママ。家族全員が揃った力を見せていこう。」

「４人揃ったところ、見せていこう。」

「ちょうど４人揃っているわね。。」

「家族の絆の力を見せていくわよ。」

「レッツゴー！」家族４人揃って折人間ページの大軍に挑んだ。周辺から各数匹の折人間があちこち現れてきた。

「まずは６時の方向に５匹。」

「１０時の方向に６匹。」

「こっちは３時の方向に７匹。」

「１時の方向に４匹よ。」４人のプリキュアが周囲にやってきた折人間ページを何時の方向を指していい、そのまま同時攻撃を行う。

「まずは５＋」

「６＋」

「７＋」

「４＝」

「２２！！」４人同時攻撃による数学の計算ように数を足してやっつけていき、同じように繰り返して、計算問題でやっていった。

「１０－５＝５！」

「５－３＝２！」

「１－１＝０！！」次は引き算で槍ながら倒す数だけ倒しながらやっつけていき、計算問題で敵の数を倒していく。

「次はかけ算よ！」

「敵が２方向から４匹よ。」

「じゃあ４×２＝８よ。」次々と敵を倒していき、計算式のやり方で敵の数を大勢倒す事に成功した。

「残りは・・・。」残ったのは教科書イライラーとリーフィアのっみであった。

「ぬぅぅぅ、まさかここまでやられるなんてあのプリキュア共そこまで強いというのか・・・・。」

「あら、何ビビっているの、おばさん。」

「負けるのが怖いのかな？」

「おばさん！！なめたまねを、イライラー！！」リーフィアは教科書イライラーに４人のプリキュア何が何でも始末して倒してやると言う強い執念で燃やして挑ませた。

「よし一気に決めるよ！」４人のプリキュアは家族４人でそれぞれの手と手を取り合い、合わせた手を前に向けた。

「プリキュアの美しき魂が！」

「邪悪な心を打ち砕く！」

「アップルサンダー！」

「チェリーサンダー！」

「ラブサンダー！」

「ハピネスサンダー！」４人がそれぞれ召還した雷を同時に放たれる事で４つの雷を合体させた。

「プリキュア・ファミリー・スクリュー・フレッシュっ！」組み合わせた４つの雷は螺旋状の雷撃を生み出され、教科書イライラーに直撃を食らわせた。

「イライ・・・スッキリー・・・・・。」家族４人のプリキュアの

合体技によって浄化されて元の教科書に戻った。

「覚えてらっしゃい！」この場から逃走するリーフィア。

「やっと片付いたわ。」

「何かヘルエビルと戦ってきたら数学がわかってきた気がするわ。」アップルが苦手な数学がなぜか戦いの際に苦手のが急にわかり始めてきたのであった。

「じゃあ早速夜の勉強もすぐに出来るね。」

「じゃあ家へ帰ろう。」こうして家へ帰り、よるまた母親二人と一緒に勉強する事になった。数学の問題を先の戦闘ですらすら解けるようになって計算問題をすぐに終えた。

「何か簡単だったわ。」

「すごい、アイが苦手な数学をすらすら解けちゃうなんて。」

「まあ、プリキュアに変身してからかな？」

「じゃあ他のも解いてみて、理科とか？」

「理科・・・・。」

「あら数学が解けたのなら理科だって解けるでしょ？」

「じゃあやってみるよ。」アイは理科の勉強に移って、理科の問題を解き始めた。理科の問題をよく考えながら一生懸命考えていくア

イの姿をラブとせつなの母親二人は娘が勉強を少し筒克服していく事を喜んだ。

次回　６話へ続く

第6話　マコトの大きな悩み事（前書き）

今回はマコトメインのお話です。マコトが悩みをか糧いて、どういう悩みかは見てのお楽しみです。新しい敵キャラ登場です。

第6話　マコトの大きな悩み事

はあー、今日もあんまりよくないかな？」そう告ぎながら、一人で歩いていくマコト。いつもならアイと一緒に歩いて出かけたりするはずだったのだが、なぜか一人でいるようだ。

「どうしよう、アイやママ二人に相談してもあんまりたいした意味はないかしら？」マコトは何か悩みを抱えている、どうしても家族には相談したくない内容で、マコトは一体何を悩んでいるのか。その頃、マコトがまだ学校から帰ってきていない事で家では彼女の帰りが遅い事で心配していた。

「マコトがまだ帰ってきていないわ。」

「いつもならマコトはあたしと一緒に帰ってきているはずなのに今日はどうして一人で帰ったんだろう。」

「いつもアイと一緒に家に帰って来ているはずなのに、今日はどうしたのかしらね？」アイとせつなはマコトがまだ家に到着しておらず、どうしたのか心配していた。

「マコト、大丈夫かな？」

「うーん、大丈夫だといいけど一人で変えると心配になるわ。」まだ道端で一人で歩き回って、何か考え事のような姿勢でいた。

「はあー、家に帰ってママ達に言ってもたいしたことじゃないわ。どうしようかな。」マコトは家族に相談しようとしてたいしたことじゃないとそう思い込み、どうしても家族に打ち明けたくないみた

いであった。日が暮れてきてそろそろ空が暗くなろうとしていたが、マコトは歩いている途中で仕事を終えて帰宅する母親のラブとあった、

「あっ、ラブママ。」

「どうしたの、一人こんなに遅くいく？せつなママやアイが心配しちゃうんじゃない。」

「ごめん、ちょっとね。」ラブはアイが浮かない顔を見て何か悩み事があるって一瞬気づいた。

「何か悩んでいる事でもあるの？」

「別にそんなんじゃないから、その・・・・。」

「隠し事はあんまりよくないよ、ちゃんと話した方がいいわ、」

「あんまりたいしたことじゃないからその・・・・。」

「恥ずかしがらないで、ママは笑ったりしないから。」

「あっ。」

「遅くなっちゃうといけないからアカルンの力を使えるようになったピルンを使って自宅まで飛ばすよ。」リンクルンを出して、せつなと結婚した事によりお互いのピックルンの力を共通に使えるようになり、アカルンの力を使えるようになったピルンを刺してマコトと一緒に自宅までワープした。ようやく自宅にたどり着いた二人は、帰りを待ち続けていた二人に心配をかけられた。

「遅いよ、二人とも～。」

「遅くなってごめん。」

「帰りの途中に偶然マコトを見つけたから一緒にここまで飛んできたのよ。」

「それより食事しましょ。」

「そうね、まずは食事からして、後マコトが何か悩んでいたから後みんなで相談に乗ろうと思っているわ。」

「あっ、いや、その・・・・・。」

「どうしたのマコト、そんなに照れちゃって？」

「私はいやその・・・・・。」

「隠し事はよくないわ。、素直に話した方がいいわ。」

「あっ・・・・。」

「じゃあ後で一緒に話していこうかしら？」マコトが悩んでいるのを家族一緒に相談に乗る事にして、それから時間が経ち、夕食を食べ終えたら早速マコトが何を悩んでいるのか相談して話し合う事にした。

「マコト、何か悩んでいるの？」

「うん・・・。」

「どうしたのその悩みって？」

「実はね。」

「？」

「私そのね、やっぱり恥ずかしくて言えないわ！」自分の悩みを今打ち明けようとしたが・・・・家族の前ではどうしても言うのが恥ずかしくて言えず、そのまま何も言わなかった。

「どうしたの？」

「そんなに恥ずかしい事なの？」

「やっぱり家族の前で言うと恥ずかしいから。」

「笑ったりしないから。」

「でもやっぱり言うのが怖くて無理よー。」結局マコト家族の前で自分の悩みを言うのが出水にそのまま、終わってしまった。その頃、別次元の世界で、ガーレードに続いてプリキュアに二度もやられてヘルエビルの首領に大目玉を食らう羽目になったリーフィア。

「ごめんなさーい！」

「黙れ！」

「この私のせいでプリキュアに二度も破られてしまいましたですわ。

」

「罰として貴様は厚化粧緒当分の間禁止する！」

「はいいいいい。」厚化粧を当分の間禁止とされて、大好きな厚化粧が禁止されて苦役や落ち込んだ。

「厚化粧が出来なくなるなんて・・・・・。」

「ふっ、何と哀れだな。」ガーレッドが近くに現れた。

「ガーレット！」

「貴様は毎回厚化粧ばっかりし過ぎるから嫌われるんだ。」

「何ですって？！」

「その薄汚い顔を今出洗ってくるんだな！」

「むきぃぃぃぃ、この私を侮辱させたな！」

「今ここでやってもかまわないぞ。」

「またんか。」二人の喧嘩を牽制しに介入してきたネクロースと3人と同じ幹部のザーゴードがやってきた。

「ネクロース！」

「それにザーゴット、いつ戻ってきたのですわ？」

「久しぶりに顔を出していこうと想ったらこんなざまか。」

「何？」

「まあ、お二人はここで休んでおくといい。ワシがプリキュアを倒しに参る。」

「ネクロース、おまえに何が出来るというのだ？！」

「そうです。だいたい、あなたみたいな取りよりが何が出来るというのですわ。」

「やってみないとわからないのう。少なくともおまえ達二人では違うからじゃのう。」

「くううう。」

「むううう。」

「おまえも一緒に来ないか、ザーゴット。」

「悪いが俺はまだ戦わないが、プリキュアのがどういう姿なのかこの目で見ておきたい。」

「そうか、ならワシが試しにプリキュアを倒しに参る。」プリキュアを倒す為に自らで出る事にしたネクロース。彼はガーレッドやリフィーアと違って何か違った戦い方をするようであった。同じ幹部のザーゴットは、まだ戦いに介入せず、プリキュアの姿がどういうのか確かめにいこうとした。そして次の日曜日、マコトは歩道橋で一人で立ったまま空を見上げて、何か暇そうな顔にみえているが、

まだ自分の悩みの事を頭の中に抱え込んでいた。

「はあー、どうしよう。ママ達にどういえばいいのか。」悩み事をまだ家族に打ち明けようとせず、言うと恥ずかしくなるとそう自分自身で思い込んでしまい、マコトは歩道橋から降りてそのまま歩いていった。マコトが歩いているのを遠方から見つめて、彼女がどういう悩みを抱え言える表情をしているのか様子を伺うアイとラブとせつな。

「マコト、どんな悩みを抱えているんだろう。」

「とりあえず様子を見ながらマコトがどんな悩みを抱えているか。」

「深刻な事だとさすがにいけないからちゃんとしっかりしないと。」そうしながらマコトの後を追って彼女の様子を伺いながらどんな悩みを語とかいろいろとみていくアイ達。マコトは人が賑やかそうにしている公園で一人ベンチでう座ったままだった。

「はあー、一人でいるとなんだか少しは落ち着くわ。でもやっぱり悩みが少しねぇ・・・・。」ベンチでただ一人で過ごして退屈そうにし、未だに悩みの事をまだ頭の中から離れずマコトは自分の悩みを家族にどう打ち明けようとするのか。

「やっぱりママ達に悩みを言うのかな？」ベンチで座っているマコトを遠くの公園の木野中に隠れながら様子を卯がうアイとラブとせつな。

「マコトの悩みいったい何なのかさっぱりだわ。」

「マコトの悩みがどういうのか様子を見てもなかなか思いつかないわ。」

「マコトは何を悩んでいるのかしら？」一同はマコトの様子から見て、悩みがどういうのかなかなかわからず、どうして悩んでいるのかわかる事が出来なかった。そんな中、公園で賑やかそうに遊んでいる人の前にヘルエビルの幹部の一人のネクロースが現れた。

「ここがミッドスターか。人の大勢いる者ばかりが多いのう。」この世界に初めて踏み入れたネクロースは人が大勢いる光景を見て、人が大勢いる場所に悪事を行って、この公園全体に怖がらせようと企み始めた。

「まずはこの場所にいる人間共を怖がらせていこうじゃないか。現れよ、イアイラー！」不気味なカードを取り出して、手に持っていたドクロに取り付けてイライラーを出現させた。

「あっ！」

「？！」この場にいたマコトとアイ達は公園にイライラーが現れて、公園にいる人々に襲いかかろうとした。

「イライラー！」

「きゃあー！」

「うわあー！」ネクロースが生み出したドクロイライラーから逃げ回る人達。ドクロイライラーは逃げ回る人達に口から黒い柱のよう

な物体を複数出した。

「ああっ！」

「閉じこめられたぞ！」黒い柱のような物体は檻のように組み立てて人々を閉じ込めた。。

「ヘルエビルの仕業ね。何とか助け出さないと！」

「マコトー。」遠くからアイ達が駆けつけに来た。

「アイ、ママ！」

「ヘルエビルがまた何か悪事をしているのを見たから。」

「イライラーを倒して助け出さないとね。」

「そうね、平気で暴れて悪事を働くヘルエビルを懲らしめてあげないとね。」

「じゃあ、早速変身よ。」４人はリンクルンを取りだして、リンクルンにそれぞれの必要なピックルンが変身した鍵を刺した。それに反応し、カバーが開き、ボタンを押して、発光し始めた。

「チェンジ！プリキュア！ビートアップ！」光が満ちて、母子４はその光によって髪と服が一変し、髪は伸び、服はダンス衣装のようなドレスに身を包み、腰にリンクルンをかけた。

「勇気と愛のハート、キュアアップル！」

「優しさと幸せのハート、キュアチェリー！」

「ピンクのハートは愛ある印、もぎたてフレッシュ、キュアピーチ！」キュアピーチに変身したラブ。

「真っ赤なハートは幸せの証、熟れたてフレッシュ、キュアパッション！」キュアパッションへと変身したせつな。

「フレッシュプリキュア！」４人家族はプリキュアに変身し、公園で暴れているドクロイライラーに戦いに挑んだ。プリキュアが戦う姿を遠くから見てこの姿を一見するザーゴット。

「あれがプリキュアか。」ザーゴットはいずれプリキュア達と戦う事を自ら悟り、まずプリキュアがどういう姿、戦いをするのかを見る事にした。

「来たか、プリキュア。」アップルは一番先頭に立ってドクロイライラーにパンチによる先制攻撃を思いっきり食らわせる。

「イライラー！」口を開いて黒い煙のようなものを吐いた。

「うわあー！」黒い煙に覆われて、アップルは逆に動きを牽制された。

「はああー！」ジャンプで高く飛んで空から思いっきりキックをお見舞いするチェリー。チェリーのキックを食らって、ダメージを受けるドクロイライラー。

「むぅ、やりおるのう。だが、この程度でやられるワシでもないわ。ゆけ、イライラー！」ドクロイライラーは目を発光させてプリキュ

アにその光を
浴びせた。

「きゃあああー！！」ドクロイライラーの光を浴びて目を眩まされて、一時的に視力がみえなくなった。

「まっ、まぶしい・・・・。」

「さっきの光で目が見えないわ！」

「イライラー！」その隙にドクロイライラーが思いっきり体当たりして吹き飛ばされる４人のプリキュア。

「あああああっ！！」地面に落とされた４人。そのまま倒れている４人に口から黒い柱を無数吐き出して牢屋を作り、プリキュア達を閉じ込めさせた。

「しまった閉じ込められたわ！」敵の攻撃で周りを封鎖されて身動きが出来ない状態になった。

「これでプリキュアも手も足も出せまいのう。」プリキュアの目を眩ませて、さらに周りを閉じ込めさせて完封させた。だが遠くからいるザーゴットはプリキュアがこの程度ではやられない事を悟り、プリキュアがどれだけの力を出すのか目を見ていた。

「やれ、イライラー！」ドクロイライラーは口から煙を吐き出して、牢屋に閉じ込めたプリキュア達に覆われさせた。

「プリキュアもずいぶん苦しんでおるそうじゃな、後はとどめでも刺しておこうか。」ネクロースはプリキュアが弱まっているのと思

い、とどめを刺して勝利をつかみ取るとそう確信した。

「そんな事でやられないわ！」

「？！」黒い煙が突如消え初め、４人が一緒に揃って立ち上がっている姿であった。

「目もようやくみえてきたわ。」

「こんな程度でやられるわけないでしょ！」

「なぜじゃ、なぜおまえらはそんなに簡単にすぐ立ち上がるんだ？！」

「それはね、あなたにはわからないわ！悪い奴からみんなを守りたいという強い想いがあるからよ！」

「絶対にあんたなんかには負けないわ！」

「こしゃくな事を、イライラー！」再び繰りから煙を吐こうとするドクロイライラー。だが口を開く瞬間を狙って、黒い柱の１本を４人で一緒に持ち上げて、そのままドクロイライラーの口に投げた。

「イライラー！」

「なっ、何？！」プリキュアに投げつけられた黒い柱を口に向けて投げられて口の中にダメージを追った。

「まだまだよ！」黒い柱を抜いた部分から折から脱出して、４人一緒にジャンプして高く飛んで、ドクロイライラーの方へ向かった。

「プリキュアコンビネーションキック！！」　４人が同時に空中から降下しながら　飛び蹴りを繰り出して、思いっきりドクロイライラーにお見舞いした。

「イライラー！」

「イライラー！！」

「ダブルプリキュアパンチ！」その隙にアップルとチェリーが真っ正面から思いっきり、ドクロイライラーにパンチによる同時攻撃を食らわせた。

「ダブルプリキュアキック！」さらに空中からピーチとパッションによる大きく降下しながら二人の同時キックで思いっきりドクロイライラーの頭上に蹴りを食らわせた。

「イライラー！」

「よし、今よ！」母子４人ははそれぞれ頭上で両手を叩いてから、左右の腰元に手をおき、　胸の前で両手を使ってハートの形を作った。

「悪いの悪いの飛んでいけ！！」

「プリキュア・ラブハート！！」

「プリキュア・ハピネスハート！！」

「プリキュア・ラブサンシャイン！！」

「プリキュアハピネスウェーブ！！」

「これが親子揃った力よ、プリキュアファミリーハート！！」それぞれのプリキュアから放つハート型の光線が同時にイライラーに向けた。

「イライ・・・スッキリー・・・・・。」プリキュアの放つ光線で敵は浄化され、元のドクロに戻った。

「ええーい！」この場から退いて撤退するネクロース。ザーゴットはプリキュアの力をこの場で侮れないと感じ、いずれ戦う日が来ると悟りながらこの場を去った。

「拝見させてもらったぞ。」それから戦いが終わって檻に閉じ込められた人達を解放して、４人はそのまま立ち去ろうとしたが、

「待ってください！」

「？」助けた人達から声をかけられてき多・・・。

「あなたたちの名前は？」名前を突然聞かれて、そのことで突然一人だけ塊始めた。

「・・・・。」

「どうしたのチェリー？」

「チェリー？」

「・・・・。」何も喋ろうとはせずそのままぎくっと固まった状態であった。

「あのー・・・・。」

「あっ、はーい。私たちはこの街を守るプリキュアです。いつも悪い奴らからこの町をいつも守っています。」

「こっ、こらアップル！」何も喋らなかったはずのチェリーが顔を赤くして恥ずかしくしていた。

「顔を赤くしてどうしたの？」

「別、別に何とも・・・。」

「あっ、わかった。もしかして人の前にプリキュアの・・・・。」

「こら、アップル！」チェリーの悩み事をわかって言おうとしたがパッションに口をふさがれた。

「んー、んー。」

「アハハハっ、またどこまでお会いしましょう。」笑ってごまかしながら、そのまますぐに立ち去って４人は自宅へ戻った。マコトの悩みがわかった3人は、マコトは大勢の人のまでプリキュアの事を聞かれる事恥ずかしう悩んでいた。

「マコトはプリキュアの事を着かけるとそんなに恥ずかしくなるんだ。」

「別、別にそんなんじゃないわ。」

「ママ達も昔よくあったけど、恥ずかしくなかったわ。」

「ママも？」

「ママ達は昔はあっちの世界ではみんなから街のヒーローとして捲られていたのよ。」

「なぎさ達もプリキュアとしていろいろとみんなから一目されていたのよ。」

「へぇー。」

「私はそんなんじゃ・・・。」

「マコトはそんな事で恥ずかしがっていたんだ、なんだか笑っちゃうな。」

「別、別に笑わないでよ。」

「マコトもまだ子供なんだから。」

「こんなことで悩んでいたなんてママも笑っちゃうわ。」

「ちょっとっ、ママ達も笑わないでー！」

「アハハハハっ！」こうして、マコトの悩みは無事解決され、またプリキュアの名がこの街で知らされるようになり、この事から街の間では正義のヒーローと呼ばれるようになった。

次回　7話へ続く

第７話　動物と自然との恵み（前書き）

咲と舞がゲストで登場します。ＳＳ好きの方には少し豪華な内容もあります。また新しい力も出てきます。

第7話　動物と自然との恵み

朝から家族で一緒にハイキングへ出かける事にした桃園一家。４人は街から離れた森林公園へへ向かうところだった。

「今日は家族揃ってハイキング♪」

「自然の恵みを感じたいわ。」ハイキングへ言って自然の恵みさを初めから楽しんでワクワクするアイとマコト。

「二人ともまだ着いたんじゃないからいきなり楽しまなくても。」

「でもせっかくだから今から楽しもうよ。」

「まあそうね、じゃあアカルンを使ってすぐにでも目的地へ辿り着こうかしら？」

「ええー、それ使うと楽しみがなくなっちゃう！」

「せつなママハイキングいく間の今から楽しみを壊すような事をしないで。」アカルンを使おうとするが、逆に子供達に突っ込まれてアカルンを使うのをやめた。

「仕方ないわ、じゃあバスに乗って森林公園まで向かうわ。」

「わーい。」

「ハイキングは家族一緒に楽しんで過ごさないと。」４人は森林公園へ向かうバスに乗り込んで、目的地まで向かった。バスでの移動

中に時間が着くまで窓から外の背景を見て緑あふれる森と綺麗な青空を眺めて自然があふれる景色を見つめた。それから時間が経つとようやく森林公園へたどり着いて、バスから降りた４人。

「わあ～、森がいっぱいだわ！」

「湖もあるわ！」二人は森林公園へ着いて、多くの緑の景色がある森や綺麗な湖がまるで子供のように大きな声を上げて元気よく活発するアイとマコトの双子。

「早速だから森廻りをいろいろと見回ろう。」

「自然の恵みについていろいろと感じたいんだから。」

「二人とも張り切っているわね。」

「昔、あの二人からいろいろと自然の事について詳しく教わったのよ。」

「アイとマコトったらあの二人によく遊んでもらったわ。」アイとマコトがまだ小さかった頃、自然の事についていろいろと教えてもらったり、よく遊んでもらった事を思い出すラブとせつな。４人はそのまま森林に入って緑あふれる自然の豊かさと恵みを味わいに森の中を歩き回った。

「綺麗だわ。」

「森がいっぱいで自然を感じるわ。」

「動物もいるわ。」この森の中にて自然の恵みと豊かさを味わいな

がら暮らしている動物の姿を見るアイ。木の上を上っていくリスの姿を見たり、草むらを走り回るウサギとシカ、森の周りを飛ぶ鳥などをこの自然における動物達が暮らしている姿を目の当たりにした。

「動物たちもこの森の中で幸せそうに暮らしているわ。」

「この緑の森の豊かさと綺麗であふれる自然の恵みの中で生きているのよ。」

「私もこういうところに住みたいわ。」自然の中で生きていく動物たちに感心するマコト。だが、動物たちは上を見上げて突然周りから身を隠して離れ始めた。

「あれ、動物たちがあわてて何でか隠れていくわ？」

「上を見て何か落ちてくるわ。」マコトが空から何か落下するようなものを顔を上に上げて見ていった。空から人の声が掛けだしてきた。

「わあああー、落ちるうううううー！！」空から人らしき人物2名が落下して来た。地面に降下するところ木の枝に掴んで間一髪助かったと思われたが・・・・。

「わあ、ああああああー！！」木の枝を掴んだ二人は枝がおれて、地面に落っこちてしまった。

「着地に失敗なり～。」

「せっかくほのかが作った時限装置をわざわざ空のところまで着いて大変だったわ。」

「ごめんごめん。」

「もう相変わらず」着地に失敗した二人はなり下なく仲良しそうに会話をしていた。そんな二人を見てどこか見覚えのある顔だと気づいて４人が近くにやってきた。

「もしかして、あなた達咲と舞なの？」

「ラブ、せつななの？」

「咲さん、舞さんもお久しぶりです。」

「アイちゃんやマコトちゃんなの？」その二人はラブやせつなやなぎさやほのかと同じプリキュアだった咲と舞。咲はキュアブルーム、舞はイーグレットにそれぞれ変身してダークフォールと戦った。二人が空から落ちて着地失敗したところ偶然この森で再会をした。

「二人とも大きくなったわね。」

「小さかった頃は本当に可愛かったわ。」

「昔よく遊んでくれたりしていたわ。」

「昔の事よく覚えてるわね。」

「もちろんよ。」自分達が幼かった頃、先と舞によく遊んでくれた事を二人にちゃんと覚えていると言うアイとマコト。

「もしよかったら咲や舞も一緒にハイキングしていかない？」

「自然の豊かさと恵みを味わない？」

「せっかくこの世界へ来たんだからラブ達と一緒に楽しんでみようかな？」

「こうして４人にここで会ったんだから一緒に行くのもありだわ。」

「じゃあ決まりね。」咲と舞の二人を連れてミッドスターの自然の豊かさや恵みを見せにいく事を決めた。この二人を誘って一緒にハイキングをしながら自然を味わっていくアイ達。同じ頃、ミッドスターに異いつものように現れるヘルエビルの幹部ガーレット。

「久々にこの世界へ訪れたか、それに着いたのが森に囲まれた場所という訳か。まるで迷路みたいだな。」ミッドスターの森林の中を歩き回りながら、まるで迷路のようにぐるぐる回っているとそう感じたガーレット。

「ああー、迷うだけでいらいらしてしまうわ。」森の中で迷いながらいらいらして起こりはじめたガーレット。

「出口はどこにあるんだ！」その頃、アイ達は森の中を出て緑の平原と青くて美しい湖やその周辺にいる動物たちがいる綺麗な景色を目の当たりにした。

「この世界も私たちと同じ世界みたいに自然が綺麗だわ～。」

「あら、そうかしら？」

「この森は動物が暮らしてて、その恵まれた自然と共に歩んでいく動物たちもいきいきしているわね。」この緑の森で恵まれた自然の

豊かさと恵みの中で歩んでいく動物達をたくましく生きていく姿を見たり、自然のすばらしさと大切さを伝わっていくのを受け取るように感じる６人。

「この世界も自然を大切にしているこころがあるわね。」

「みんなが自然を大切に愛し合うこころがあるから大切にされているんじゃないか思ったのよ。」咲と舞が仲良しそうに座っているところ可愛い一羽の鳥が飛んできた。

「あっ。」自分達のところに飛んできた鳥を見て、じっと見つめながら鳥をよく視察した。

「可愛い鳥だわ。」

「可愛い鳥さんが私たちのところへ飛んできたのは偶然かしら？」

「静に。」６人は音や体を動かさないように鳥の様子を見た。鳥はピョンピョン歩きながら翼を大きく広げて飛び回った。

「わあ、鳥が飛び回っているわ。」

「可愛いね。」

「うふ。」６人は綺麗な景色を眺めていながら楽しそうに過ごした。お昼の時間が来て６人はこの緑の平原でマットを敷いてその上で座り込んで、食事を取る事にした。

「あら？この可愛い卵焼きは誰が作ったの？」

「私が焼いたんです。」

「今日朝早くから家族全員で起きてお弁当を一緒に作ったんです。」家族全員で朝早くから起きて家族一緒にお弁当を用意をして、それぞれ自分達がお弁当に入れる為の料理を作ったり、家族みんながおいしく食べれるよういろいろ工夫しながらした。

「へぇー、家族全員で作ったんだ。」

「休みの日とかは家族で一緒に過ごす事が多いから私やラブやアイやマコトは家族を大切にしているのよ。」

「4人とも家族を大切にしているんだね。」

「家族でやり取りしているあなたたちは家族を一番大切に思っているんだね。」

「ありがとうございます。」

「家族でいるのが私たちの幸せですから。」

「うふ。」家族を大切にし合い、一緒にいるのが一番の幸せであるももZの一家。楽しい昼食を過ごしながら緑の自然を拝見して、自然のすばらしさを共感した。そして昼食を食べ終えて6人は湖の方へ近寄った。

「湖が綺麗だわ。」

「何事のように綺麗だわ。」

「まるで泉の郷と同じように水が綺麗だわ。」

「そう言えば泉の郷は今どうなっているのかしら？」

「今も枯れることなくその自然も生きているわ。」

「そっちも無事って事ね。」

「ダークフォールとの戦いが終わってから今でも泉の郷はちゃんと綺麗に生き続けているのよ。」

「よく咲と一緒に毎日のように訪れているのよ。」

「そうなんだ。」

「フラッピやチョッピやムープやフープも満や薫も元気でいるわ。」

「そうなんだ。」自然のすばらしさを楽しむ6人。だが遠くの方から大きな音が鳴った。

「？！」

「何の音かしら？」

「森から動物たちが出ているわ！」遠くの方から大きな音が鳴って、あわてて逃げ出す動物たちを見た。

「どういう事が起きているのかとにかく行ってみよう。」

「うん。」大きく響いた音の鳴った場所へ急いで向かう事にしたア

イ達６人は森の中へ入った。場所へ辿り着いた６人は、木が何本か切り落とされているのを見た。

「ひどい・・・・。」

「誰がこんな事を・・・・。」

「はあー、こんなところへ行くと迷子になっていらいらするぜ！」森林の中で迷子になって現れたガーレットが森林の木を大斧で切り落としていた。

「ヘルエビル！」

「ん、おまえ達はプリキュア！」

「知っているの？」

「はい、この世界でいつも暴れているは悪い奴です。」

「よく言ってくれたな。ならこの森ごと貴様らをまとめて潰してくれるわ！出よ、イライラー！」不気味なカードを取り出して、近くに木になぐ着けてイライラーを呼び出した。

「イライラー！！」ウッドイライラーは指を長く伸ばして６人に襲いかかった。

「わあっ！！」下にしゃがんで攻撃をよけた６人。

「何あれ？！」

「イライラーと言う化け物です。いつもこの世界で暴れている怪物です。」

「この世界もまたダークフォールみたいなのがいるわけね！」

「今は何とかしないと。」この緑の自然で暴れるイライラーを何とかしないとこのままでは森林全体が荒らされてしまう音になる。

「アイ、マコト、変身して戦うわ！」

「うん。」

「わかっているわ。」

「せっかくのハイキングを台無しにするなんて許さないわ！」４人はリンクルンを取りだして、リンクルンにそれぞれの必要なピックルンが変身した鍵を刺した。それに反応し、カバーが開き、ボタンを押して、発光し始めた。

「チェンジ！プリキュア！ビートアップ！」光が満ちて、母子４はその光によって髪と服が一変し、髪は伸び、服はダンス衣装のようなドレスに身を包み、腰にリンクルンをかけた。

「勇気と愛のハート、キュアアップル！」

「優しさと幸せのハート、キュアチェリー！」

「ピンクのハートは愛ある印、もぎたてフレッシュ、キュアピーチ！」キュアピーチに変身したラブ。

「真っ赤なハートは幸せの証、熟れたてフレッシュ、キュアパッション！」キュアパッションへと変身したせつな。

「フレッシュプリキュア！」４人家族はプリキュアに変身して、森林で暴れるウッドイライラーをここから切り離していく為、まずは相手をうまく誘導していく行動を取った。

「こっちよ！」

「追えるものなら追ってみなさい！」

「大きいから暴れるなー！」４人はウッドイライラーを言葉で挑発させてうまく森から切り離そうとする。４人のところへ近づいて追いかかるウッドイライラー。

「イライラー、プリキュアを始末しろ！」

「イライラー！！」頭の木からリンゴ型爆弾を発射してプリキュアの後ろを狙った。

「きゃあああー！！」敵から発射されたリンゴ型爆弾で吹き飛ばされるプリキュア４人。

「後もう少し辛抱して！」何とかこの緑の森で暴れさせないようになるべく外へたどり着くまでうまく引きつけていこうとするプリキュア達。

「いらいらさせやがって！イライラー、今すぐに始末しろ！」

「イライラー！」腕を伸ばしてプリキュア達に掴みかかろうとする。

「危ない！」後ろから伸びてきた腕をすぐにかわして、ようやく外まで辿り着いて一気に反撃に乗り出した。

「今度はこっちから行く番よ！」

「４つに分かれて戦いましょう！」家族４人プリキュアはそれぞればらばらになって４方向からウッドイタイターに攻撃を仕掛けた。

「はあああっ！」１時の方向から思いっきり跳び蹴りでウッドイライラーのの頭を狙うアップル。アップルの跳び蹴りを食らってダメージをくらい、続いて１０時の方向からチェリーのパンチ、５時の方向からピーチのパンチ、８時からパッションのキックがそれぞれの方向から来てウッドイライラーに攻撃を与えた。

「イライラー！」プリキュアの攻撃を食らって思いっきり後ろへ押されていく。指を伸ばしてムチにように振り回してプリキュアに向けようとした。横に飛んでムチをかわして、地面におろされたムチを二手に分かれて左右の伸びた指を持ち上げてウッドイライラーを地面にたたき落とした。戦いはほぼプリキュアが優勢と思われていたが、

「今よ！」

「そうはさせるか！」遠くから熱光線が発射されてプリキュアに向けられた。

「きゃああっ！」ガーレットが乱入して、イライラーにとどめを刺せるところ彼によって阻まれてしまった。ガーレットは大斧を出して、大斧を炎に覆わせてプリキュアを薙ぎ払った。

「きゃああー！！」ガーレットの炎攻撃で大きなダメージでやけどを負い、また緑の平原がガーレットの攻撃で焼き払われてしまった。

「下らん、自然など実に下らん！」

「何がくだらないの・・・。」

「ん？」

「自然を汚して、さらに森や動物達まで泣かせた。」ガーレットとイライラーがこの森で暴れてこの森にいる動物や自然などを泣かせて、怒りに燃えるプリキュア４人家族。

「それがどうした！そんなのは俺の知った事ではないわ！」

「もう絶対に許さない！」ガーレットのくだらないという発言に対して自然を汚す邪悪な存在によって今自然が泣き叫んでいた。自然でも自然を汚す物を絶対に許さないと心情を表した。

「たわけた事を！」イライラーと一緒に同時攻撃でプリキュアに熱光線を放って食らわせるガーレット。

「あああああっ！」二人の同時攻撃を食らいつつそれでも倒れない４人。

「しぶとい奴だな。」

「まだよ・・・！」アップルが思いっきり飛び込んでガーレットに殴りかかろうとした。

「邪魔だ！」逆にガーレットが大斧を振り回してアップルにぶつけて、吹き飛ばした。

「あああああっ！」

「アップル！」

「今日で終わりにしてやる！」ヘルエビルからこの森の自然や動物たちを守り抜く為、命を張ってでも守り抜こうとするプリキュア達。そんな中、４人の前に咲と舞が現れた。

「咲。」

「舞。」

「自然や動物たちのいつも大切にするあなたたち４人を見せてもらったわ。」

「あたし達の力を使えば守り抜けるわ。」

「咲さんと舞さんの力？！」

「私たちの花の精霊と鳥の精霊の力、あなた達に渡すわ。」咲と舞から光が現れて、その光が４人に移り、その光が４人に輝きはじめた。

「あああっ。」輝いた光はアップル、チェリー、ピーチ、パッションのそれぞれの腕に装着されたブレス型はスプラッシュリングと呼ばれた。

「何度もやっても同じ事を！」再び一斉攻撃を仕掛けてプリキュアに向けるが。４人が装着したスプラッシュリングでバリアを張って防いだ。

「何？！」

「あんたなんかにあたし達は負けないわ！」

「さっさとこの森から出て行きなさい！」

「下らん事を、イライラーやれ！」

「イライラー！」頭からリング型爆弾をたくさん発射してプリキュアに向けようとしたが。

「こんな危ないもの綺麗なところで汚させないわ！」スプラッシュリングから突風を起こしてリング型爆弾を大空高く吹き飛ばして、大空で爆発させた。

「何？！」

「これでも食らいなさい！」４人のスプラッシュリングからエネルギー弾が放たれて、ガーレットとウッドイライラーに向けられた。

「ぐわああー！」

「イライラー！」４人の一斉攻撃を食らって大きくダメージを負い、一気に形勢が逆転されて不利に陥った。

「今よ。」キュアイブルーム、キュアイーグレットの力を授けた４人のプリキュアが福生つ技を構えようとした。

「精霊の光よ！」

「命の輝きよ！」

「希望へ導け！」

「全ての心！」４人の呼びかけて精霊の力を収束した。

「プリキュア・スパイラル・ハート・フレッシュっ！」収束した精霊の力をスプラッシュリングから４つの混ざり合った螺旋状のエネルギーを放ち、ウッドイライラーとガーレットに向けた。

「ちぃ！」必殺技が来る直前にすぐにこの場から引いたガーレット。４人の放った必殺技でハート型の枠によってウッドイライラーを包み込んだ。

「イライ・・・スッキリー・・・・・。」新たなる必殺技でによって浄化されて、元の木に戻った。

「やったわ！」無事戦いが終えて、緑の自然を守り抜いたプリキュア達。戦いが終えた４人は再び、自然の景色を眺めていた。

「綺麗な景色だわ。」

「綺麗ね。」

「４人とも、すっかりこの自然の景色を眺めているね。」

「なんだか美しいね。」緑あふれる恵みと豊かさと美しく綺麗な景色を6人はこの自然を眺めて自然のすばらしさを大切に想うその真心を用いれた。そろそろ時間が日が暮れる事で咲と舞は元の世界へ帰って、桃園一家4人はバスに乗りながら自宅へ帰ろうとした。

「今日は疲れたわ。」

「でも今日はいっぱい自然や動物が見れて楽しかったわ。」

「また行きたいわ。」

「楽しい1日になったわね。」こうして4人は自然をすばらしさを楽しんで、長い1日を過ごしたのであった。

次回　8話へ続く

登場人物２（前書き）

滴キャラとクラスメイトと用語設定とアイテムです

登場人物２

ガーレット
イメージＣＶ：稲田徹
ヘルエビルの幹部の一人。赤い民族服の衣装を着ているのが特徴で、気にくわない事は何でも攻撃する事が多く、特に自分の失敗したときは仲間に八つ当たりしたりするケースがある。戦闘においては炎系や熱系の攻撃を得意としている。専用武器は大斧。大斧から炎を纏わせる。

ザーゴード
イメージＣＶ：中井和哉
ヘルエビルの幹部の一人。黒色の和服を着ているのが特徴で、彼は常に冷静沈着で特に喋る会話が全く少なく、いつも無口な性格だが、剣術の腕前はかなり高く、プリキュアを倒すほどの力を持つとされている。戦闘ではイライラーを召還せず、自らプリキュアに挑んでいく事がある。専用武器は大太刀である。

リーフィア
イメージＣＶ：斉藤千和
ヘルエビルの幹部の一人。ヘルエビルの幹部において唯一の女性幹部で、彼女は髪型が巨大なポニーテールと緑色のコットンドレスが特徴で、会話に「ですわ」と語尾をつけ、特に自分の気に入った物は何でも自分のコレクションにしようとし、欲しい物の為なら例え手段を選ばず、力づくで強引に相手から奪う。また顔が特に厚化粧で顔の肌を綺麗に保たせる事で、またおばさんと言われると逆ギレして怒る。専用武器は扇子。扇子から風を放つ。

ネクロース

CV：柴田勝秀
ヘルエビルの幹部の一人。術士の服装を着ているのが特徴。彼は一見年寄りでありながら、魔術や呪文などを使う事が多く、また自分が出すイライラーはほぼ他とは異なるタイプを出す事が多い。ヘルエビルの幹部の中で一番年が上で大幹部とも言える存在でもある。彼にはまだいろいろ未知の力があると噂されている。専用武器は杖で、魔術や呪文を使う事が多い。

ワルイナー
ヘルエビルの戦闘員。力はそれほど強くなく、やられる事が多い。数が多ければ多いほど集団戦で襲って来る事が多い。武器は黒い棒を振って叩く。

佐々木堺
アイとマコトのクラスメイト。彼はいつもアイと絡む事が多く、喧嘩する事がよく多い。アイの事をいつも想っている一面がある。彼は陸上部に所属していて、走るのが一番得意。

原由樹
アイとマコトの通う華野実私立学園のクラスメイト。学校でよく話したりする事が多い。趣味はよく絵を描いたりすることで、植物や空や動物などを書いたりしている。

野々村美佳
アイとマコトの通う華野実私立学園のクラスメイト。学校では由樹と同じようによく話したりする事が多く、クラスでいつも明るい笑顔を見せて困っているクラスの生徒をいつも励ましたりしている。

アイテム
マックスブレス

なぎさとほのかの二人から授かったブレス型の強化アイテム。スパークル・ブレスに似ている部分があり、光の力が宿っていて、アップルとピーチは右腕、チェリーとパッションは左腕にそれぞれ装着される。　装備すると能力が上昇する他、強力な必殺技を放つ事が可能。また４人同時に揃うとさらに強力な必殺技を出す事が可能。

必殺技

プリキュア・マーブル・スクリュー・フレッシュ

アップルとチェリーが繰り出す必殺技。技はブラックとホワイトの放つプリキュア・マーブル・スクリュー・マックス・スパークと同じであるが、一部の掛け声が変わっており、アップル「アップルサンダー」、チェリー「チェリーサンダー」と叫びマックスブレスから雷を召喚し、それに合わせて「スパーク！」という掛け声を同時に放つことで桃色と赤の螺旋状の雷撃を生み出され、エネルギーを発射する。

プリキュア・ファミリー・スクリュー・フレッシュ

アップル、チェリー、ピーチ、パッションが繰り出す必殺技。技はプリキュア・マーブル・スクリュー・フレッシュの強化版とも言えるが、一部の掛け声にピーチが「ラブサンダー」、パッションが「ハピネスサンダー」と叫び４人が召還した雷を合わせて　螺旋状の雷撃を生み出す。

スプラッシュリング

咲と舞の二人から授かったブレス型の強化アイテム。　スパイラル・リングに似ている部分があり、精霊の力が宿っており、アップルとピーチが左腕、チェリーとパッションが右腕にそれぞれ装着される。装備すると　空中浮遊・水面着地・エネルギー弾・突風・バリアといった様々な特殊能力を使用する事が可能。強力な必殺技を放つ事が可能。

必殺技
プリキュア・スパイラル・ハート・フレッシュ
アップル、チェリー、ピーチ、パッションが繰り出す必殺技。ブルームとイーグレットの放つプリキュア・スパイラル・ハート・スプラッシュと同じである。掛け声の方はゴーヤーン戦の掛け声で、アップルが「精霊の光よ！」、チェリーが「命の輝きよ！」、ピーチが「希望へ導け！」、パッションが「全ての心！」と呼びかけてスプラッシュリングから４つの混ざり合った螺旋状のエネルギーを放ち、ハートの型の枠で相手を包みこむ。

用語
ミッドスター
世界観はラブ達の住んでいる世界と変わらないが、街などが少し近未来都市風で、建物などが少し変わったところばかりで、この世界は特に変わった事や目立った事が特にないが、謎の組織ヘルエビルが最初のこの世界を征服しようととしている。

華野実私立学園
アイとマコトの通う学校。この学校は普段ラブ達の世界にある学校とほぼ変わっていないが、外見は少し未来風で、授業の内容は体育、文系、理系の３つを中心に勉強し、高校や大学も存在し、中高大一貫の学校でもある。

リンクルン
プリキュアに変身する為のアイテム。ラブが変身して使うリンクルンの色はラブは桃色と白、せつなのは赤と白。アイとマコトのは桃色と赤で、それぞれのカラーリングごとに分けられている。変身以外だと電子メールや携帯電話として使用したり、別世界にいる人との連絡を取る事も可能。

第8話　もう大パニックでもう大変?!（前書き）

今回はアイとマコトのピックルンの機能とヘルエビルの戦闘員のワルイナーの登場です。ワルイナーは少しスナッキーにみえるところがあっておもしろいのです。

第8話　もう大パニックでもう大変?!

別の異次元世界の漂う大きくて不気味な城。そこはヘルエビルの居城であった。そこである作戦を立てようと企む幹部達が話し合っていた。

「ミッドスターを大いに征服して行くには大規模な作戦を立てていくのじゃ。」

「その大規模な作戦というのは一体どういう事を立てればいいんだ?」

「リーフィアがすでに考えてきたんでのう。」

「あの女が?」

「はーい、その通りですわ。すでに打つ手は考えてありますわ。」

「ふむ、おまえがどんな作戦を立てたと言うんだ?」

「ふふふ、それはミッドスターに大きな嵐を起こすのですわ。」

「ほお、すでに実におまえらしい作戦のようだな。」

「ええ、そうですわ。先日あの世界にある天候観測施設に狙いを定めて。、あの世界の気象を予測するのではなくて天候をどんな状態でも発生出来るようにするのですわ。」

「素晴らしい考えだな。」リーフィアはミッドスターの心星町にあ

る気象観測施設を狙って、そこでイライラーを出して天候をいつでも出せるような状態にして嵐を発生させてようにしようとする作戦であった。

「この世界を征服したら次はどんどん他の世界も征服をしていきますわ、オーホッホッホッホッホっ！」

「その作戦はたぶん失敗するだろう。」横からリーフィアに口出しするザーゴード。

「ザーゴット！」

「ザーゴット、貴様はなぜリーフィアの作戦が失敗すると決めつける！」

「プリキュアを忘れたのか。」

「プリキュア、あの忌々しい４人組の事ですか！今度こそこの私が仕留めて上げますわ！」

「いくらおまえがプリキュアに挑もうがおまえでは奴らには勝てない」

「くぅ、生意気な事を！」

「俺は事実を言っただけだ。」

「仕事をしていないあなたに言われる筋合いはないですわ！」

「・・・・・。」そのまま仲間の元を立ち去るサーゴット。

「今に見ておれ、必ず作戦を成功させてプリキュアを倒してやる！」嵐による大規模な作戦を実行して、ミッドスター全体を嵐を発生させると言う事で、またプリキュアも倒す事にも執念を燃やすリーフィア。ミッドスターでは、明日の朝から雨が降ると言う予報をテレビで視聴するアイ達。

「明日は雨ね。」

「仕方ないわ、雨が降るのも自然現象だから。」

「明日は傘をさして登校ね。」

「まあ仕方ないわ、学校が行きづらくなるのも残念だけど仕方ないわ。」

「雨なんかなくなればいいのに。」

「こら、過激な事言わない。」

「だって雨が降ると行きづらくなるよ。」

「我慢しながら行くのよ。」

「はあーい。」明日は雨が降ると思われ、学校へ行くときは傘を持ちながら登校する事になった。部屋でネッドの上で寝ころぶアイとマコトは自分達の持っているピックルンとリンクルンを出して何か機能があるんじゃないかいろいろ試しでやろうとしていた。

「そう言えばあたし達の持っていおるリンクルンとピックルンは変

身以外にも機能があるのかな？」

「そう言えばそうね。ママ達の持っているピックルンはいろいろ機能があるから私とアイのは何があるのかな？」

「二人ともまだ自分達のピックルンの機能の事まだわかっていないの？」

「うん、前から思っていたんだけど。」

「じゃあママが今変身以外の使い方を見せて上げるから貸して。」二人は母親二人にピックルンとリンクルンを手渡し、二人の持つピックルンの機能についてお見せしようとした。

「♪」二人の持っていたピックルンとリンクンを刺して、それぞれの機能を使った。アイのリルンから癒されるような音が流れ始めた。

「静かに響く音だわ。」ミルンから流れてくるその静かに響く綺麗な音で癒されるアイ。

「リルンは音を流して静かに響いていやしてくれる効果があるのよ。例えば疲れているときや困っているときとかそれ以外だと動物や植物にも聞かせてあげるといいわ。」

「リルンにはそんな機能があったんだ、リルンから流れてきた音楽を聴いたらすっかり癒されちゃったわ。」

「うふ。」一方、マコトのミルンからは香水のようなにおいが出てきて気分をよく香ばしい香りをかいた。

「綺麗でいいにおいだわ。なんだかとっても優しい香りだわ。」

「ミルンは香水出てきて気分を晴れやかに落ち着かせる効果よ。」

「ミルンは香水みたいで、その香りをかいたらなんだKらすごく気分が落ち着いてくるわ。」それぞれのピックルンの機能でアイとマコトは気分が落ち着いていき、自分達のピックルンですっかりリラックスした状態でいた。

「今夜はゆっくり眠れそうね。」

「じゃあ今夜はおやすみ。」

「おやすみなさい。」こうして明日に向けてぐっすり寝過ごす4人。静かな夜に眠る中で忍び寄る魔の手が迫ろうとした。ミッドスターの心星町にある気象観測施設では、明日から雨が降るという事で気温、風向風速、降水量等を測定して行う、施設の研究員達。

「明日は雨が降る模様だな。」

「こんなところで何をされているのですか?」突然施設内に現れたリーフィアとその数の多い下っ端ワルイナー軍団。

「何だね、君たちは?」

「失礼です話、ここを占拠させていただくですわ。ワルイナー、ここを占拠するのですわ!」

「ナー!」施設内全体を占拠にかからせて、施設内の人間への襲撃や装置などを大勢のワルイナーを動員させて占拠し始めた。施設内

の各部屋全体を全て大勢のワルイナーによって次々と占領されて、ミッドスター征服の為に着々と作戦を勧めた

「オーホッホッホッホー、一気にこの世界を征服するのですわ！」

「何をするんだ、一体何が目的だ！」

「お黙り！今から素晴らしい明日を私たちが作り上げて差し上げますわ。出よ、イライラー！！」近くにある気象観測マシンに取り付けてイライラーを出現させた。

「イライラー！」

「わああー！」

「さあ、明日の天気はこの世界各地で台風を発生させるですわ！」ヘルエビルの史上最大の作戦が今行われようとした。気象観測マシンイライラーによる明日の天気を世界各地に台風を発生させて、被害を出してその際に一気に攻め込もうとする事を実行開始した。翌日朝が来て、天気が突然大雨、強風にうなされ、雨や風が激しく吹いていた。せつなはは早く起床して朝の準備をするところだったが、

「あれ、今日降るはずだった雨はどうして強く降っているのかしら？」せつなは窓から外の様子を見て今日降るはずだった雨がいつもより激しく降っていたりしているのにふと疑問を感じた。

「おかしいわ、今日は台風でもないのにどうして雨や風が吹いているのかしら？今日の天気は本当に怒鳴っているのかさっぱりわからないわ。一度テレビをつけてニュースを見ないと。」テレビをつけてニュースを見て今日の天気の予報を調べてみたら・・・・。

「こちら雨風が突然激しく吹いています！何事もなくなぜか台風がこの心星町を直撃しています！」何と台風がこの心星町に直撃している事をニュースで報道され、なぜ台風が来ているのか原因も不明で困惑していた。

「それだけではありません、この町以外にも世界各地で台風が発生されている模様です！これは一体どういう事でしょうか？！」

「・・・・。」この町以外にも世界各地で台風が発生されていて、各地で謎の異常気象が起きているという現象が模様であった。せつなはこの台風に対して不信に思い始めた。

「台風が来るなら来る前にニュースで報道していたわ。それなのにどうして台風が突然世界各地で発生しててとても怪しいわ。」普通の台風でない事を見抜いて、せつなはまだ寝ているラブ達に起こしにかかった。

「起きてー！」

「ふあー。」

「せつなママどうしたの急に？」

「大変よ。」

「大変って？」

「台風がこの町・・・世界各地で発生しているのよ！」

「えええええー！」

「台風が世界各地で発生しているって？」

「わからないわ？」

「とにかく一度1回に集まってニュースでいろいろと見て調べる必要があるわ。」1回に降りて4人はテレビで世界各地で起きている異常な台風の事についてニュースを見た。

「台風が世界各地で起きているのはあり得ないね。」

「昨日のニュースでも台風による暴風警報も出ていないのに今日になって台風が来るのっておかしいと思うわ。」

「それに世界各地で台風が発生しているのも疑問に思うわ。」4人は大尉ふうがなぜ今になって発生して、世界各地でおちこち発生しているのか疑問に思い始めた。4人が感上げている中でニュースのアナウンサーからこんな発言が出てきた。

「気象観測所からの連絡が全く来ていません。これはどうなっているのでしょう！」アナウンサーの発言から観測所からの連絡が来ていないという事に不信を感じた4人。

「観測所から連絡がないって・・・。」

「たぶんヘルエビルの仕業かもしれないわ。」

「どう見てもただの台風とは思えないわ。」

「そう言われてみても確かに言えるわね。」

「観測所が連絡が来なかったのもヘルエビルが何かをしたに違いないわ。」

「とにかくプリキュアに変身しましょう。」今回の台風の件でヘルエビルの仕業と見抜いた４人は心星町の気象観測所へ向かう為、プリキュアに変身し始めた。

「チェンジ！プリキュア！ビートアップ！」光が満ちて、母子４はその光によって髪と服が一変し、髪は伸び、服はダンス衣装のようなドレスに身を包み、腰にリンクルンをかけた。

「勇気と愛のハート、キュアアップル！」

「優しさと幸せのハート、キュアチェリー！」

「ピンクのハートは愛ある印、もぎたてフレッシュ、キュアピーチ！」

「真っ赤なハートは幸せの証、熟れたてフレッシュ、キュアパッション！」

「フレッシュプリキュア！」プリキュアに変身した４人はヘルエビルが占拠した気象観測所へ向かう為、アカルンにつからでワープして移動した。アカルンのワープで観測所へ到着した４人は中は何とワルイナーがいっぱいいて、不運に敵に見つかってしまった。

「わわわわっ！どうなっているのよ？！」

「中には敵がいっぱいだわ。」

「囲まれているわね。」

「どうしよう・・・・。」大勢のワルイナーに囲まれてしまって、いきなり窮地の聴きに晒されてしまった４人はこの大勢のワルイナーにどう立ち向かっていくのか。

「来るわよ！」ワルイナーが一斉に襲いかかって４人のプリキュアに近づいてきた。

「はあああー！」

「ナー！」

「ええええーい！」

「ナー！」周りから近づいてくるワルイナーをパンチやキック等の肉弾戦でお見舞いしてやっつけていき、次々とやってくるワルイナーにも同じように繰り返してやっつけていく。

「ナー！」複数に襲いかかってアップルの周りに近寄った。

「わあー！」複数のワルイナーから逃げ回っていき、いくら大勢の敵を倒しても数が多すぎて次々と現れて、倒してもきりがなく、このまま時間を消耗してしまうどころであった。

「これじゃきりがないわ。」

「早いところ何とか台風を止めないと。」

「でもその前にどうしたらいいの？」複数のワルイナーを咲きに片付けていかない限り先に進む事が出来ず、大勢の数を相手にどう対処していくのかであった。

「何か楽な方法はないのかな？」逃げ回りながら何か得策な事はないか考え始めるアップル。

「そうだ、昨日ママから教えてもらったピックルンの力なら簡単に音で止めれるかも！」昨日ラブから教えてもらったピックリンのリルンの力を使ってリンクルンに刺して、リンクルンから静かな大人流れ始めた。

「ナっ？！ナー・・・・・・。」リルンの流れてきた音を聴いて大量のワルイナーが癒されて倒れ込んだ。

「すっ、すごい・・・。」またアップルがリンを使って大勢のワルイナーを癒させて倒れ込んだのを見た3人のプリキュア。

「アップル、どうやってやっつけたの？」

「リルンを試しで使ってみたら、そうしたら何回忌なり倒れちゃったのよ。」アップルから話した説明を聞いてピーチとパッションはある事を思いついた。

「いい事思いついたわ。」

「何か考え事でもあるの？」

「チェリー、ミルンの力を使って！」

「わかったわ、アップルがそうしたんだから私にも出来るはずよ！」チェリーもアップルがピックルンを使ってうまく敵を一気に陥れて、こちらもピックルンのミルンを使って香水による香りを使って大勢の敵にかかせた。

「ナー・・・・。」ミルンの綺麗でさっぱりする香りによってワルイナーが次々とたくさん気持ちよく倒れ込んだ。

「こっちも出来たみたいだわ！」

「じゃあ二人ともピックルンの力で思いっきりやっちゃいなさい！」

「はあーい！」二人はピックルンの力を思い切り使って音と香水による組み合わせた癒される快感でワルイナーに響かせてかかせた。

「何とか片付いたみたいだわ。」

「急いで台風の発生している部屋まで急ぎましょう！」アップルとチェリーによる二人のピックルンの力で大勢のワルイナーを片付ける事に成功してそのまま台風の発生している部屋へ急いで向かった。その頃、台風の発生している部屋にいるリーフィアは、

「ふあ～、なんだか退屈ですわ。」捕らえた施設内の研究員の人達を身動きを防いで、椅子に座ってあくびをしながら退屈そうにしていて、まだプリキュア達がここへやってくる事に気づいておらず暇そうにするリーフィア。気象観測マシンイライラーは台風を世界各地に発生させ続けてさらに他の各地にも発生させていた。

「ミッドスター征服も夢ですわ。イライラーも頑張っていらっしゃ

いますわね。」

「ナー！」退屈そうにしているリーフィアの前に1匹のワルイナーが近くにやってきた。

「どうしたのですわ？」

「ナっ、ナっ、ナー！」ワルイナーの言葉を翻訳してプリキュアがここへ現れたという事を知ったリーフィアは。

「プリキュアがここにですか？！」

「ナー、ナー！」

「また私の邪魔をするつもりですわね。どうしていつも毎回現れてくるのでしょうかしら？」

「ナー，ナー！」

「！！」ようやく気象観測マシンイライラーのいる部屋へ乗り込んで来てようやくたどり着いた4人のプリキュア家族。

「あなたのしわざだったのね、リーフィア！」

「あら？珍しくも名前で呼ぶとは以外ですわね。」

「さあ観念しなさい！あんたとイライラーもここで終わりよ！」

「終わりですか？あら、私とイライラーとの戦いはまだですわ！」扇子を振って、風を起こしてプリキュア達に向けるリーフィア。

「そうはさせないわ」スプラッシュリングを呼び出して、それぞれの腕に装着してバリアを出してリーフィアが放った風を防いだ。

「防がれましたわね。イライラー、おやりなさい！」

「イライラー！」気象観測マシンイライラーに攻撃の指示を出して、気象観測マシンイライラーは自体から雲を呼び出して雷を鳴らせてプリキュアに落とそうとした。。

「危ない！」気象観測マシンイライラーから降ってきた雷をすぐにかわした４人のプリキュア。かわした直後に次は気象観測マシンイライラーの強烈な突風が吹いてきた。

「あああああっ！」突風によって吹き飛ばされた４人。

「イライラー！」続いて今度は雨４人の上に降らせた。雨が降る瞬間、スプラッシュリングからバリアを張って、傘代わりに使って雨からぬれずにした。

「もう雨は勘弁よ！」

「もう雨雨でもういらいらするわ！」

「イライラーを倒さない限り天気だって納まらないわ。」

「リーフィアの近くに捕まっている人達がいるわ。」周りの状況を把握してイライラーを倒す事だけでなくリーフィアの近くにいる施設にいる人達が捕まっていて、何とかしてこの打破をどう打ち破るか。

「どうしたらいいの？」

「焦らないで、いい考えがあるわ。」

「えっ？」

「まずはリーフィアにあれ言っちゃいなさい。」

「わかった。」

「？」

「やーい、おばさんこっちまでおいで！」リーフィアにおばさんと発言してうまく挑発させてなるべく施設の人達から切り離すようにするアップル。

「おばさん・・・・よくもまた言ってくれてんじゃねぇぞこのプリキュアのガキがぁ！」

「わあ、おばさんと呼ばれるとすぐ怒るんだね。それじゃ顔もだめになっちゃうね。」

「やかましい！」怒った状態でそのまま４人の所へ襲いかかってきたリーフィア。

「来たわ、せーのっ！！」接近して来るリーフィアにスプラッシュリングから４人同時に一斉に突風をお見舞いして彼女を上に飛ばして天井の外まで吹き飛ばした。

「あーれえええええー！」

「やったわ、これでリーフィアがいなくなったわ。」

「でもイライラーが襲ってくるわ！」リーフィアを追い出す事に成功したが、イライラーがまだ側にいた。リーフィアがいなくなって気象観測マシンイライラーは自ら襲いかかり、プリキュア達に天候攻撃を仕掛けようとしてきた。

「そうはさせないわ！」アップルとピーチがスプラッシュリングの力で空中に飛んで舞ながら空から急降下しながらキックをお見舞いする。

「ダブル・プリキュアキック！」母子二人のプリキュアによる同時攻撃で気象観測マシンイライラーに直撃を食らわせた。

「今よ！」その隙にチェリーとパッションが捕まっている人達を救出し、彼らに縛られている縄などをほどいた。

「助けてくださってありがとうございます。」

「どういたしまして、ここは危ないから早く非難して。」そう言いながら施設の人達を咲きに逃げさせた。

「よし捕まった人達が無事逃げてくれたんなら思う存分戦っていくわ！」

「早く戦いを終わらせて学校とかもいかないと！」

「ええ、こっちは仕事に間に合わないと！」

「じゃあ一気に決めるわ！」すぐに戦いを終わらせて、それぞれ学校や仕事へ着く為一気に攻勢を取って、同時攻撃をお見舞いする。

「プリキュアクアドラプルパンチ！」母子プリキュアが４人同時に繰り出すパンチ攻撃で気象観測マシンイライラーに大ダメージを負わせた。

「イライラー！」続いてさらに４人同時に高く飛んで空中からによるキックも行いはじめた。

「プリキュアコンビネーションキック！」空中から降下しながら飛び蹴りを繰り出して、さらに気象観測マシンイライラーに食らわせた。

「よし今よ！」４人のプリキュアが必殺技を構えようとした。

「精霊の光よ！」

「命の輝きよ！」

「希望へ導け！」

「全ての心！」４人の呼びかけて精霊の力を収束した。

「プリキュア・スパイラル・ハート・フレッシュっ！」収束した精霊の力をスプラッシュリングから４つの混ざり合った螺旋状のエネルギーを放ち、気象観測マシンイライラーに向けた。

「イライ・・・スッキリー・・・・・。」４人の放った必殺技でハ

ート型の枠によって気象観測マシンイライラーを包み込み、浄化されて元の気象観測マシンに戻った。

「やったわ！」気象観測マシンイライラーを倒した事で世界各地で発生していた台風が止まり、やがて世界各地に安定がもたらされた。

「これで世界は救えたわ！」無事戦いを終えたプリキュア４人家族達。戦いが終わってすぐに自宅に戻って学校や仕事へ出向した。その頃、史上最大の作戦が失敗してしまって、ヘルエビルでは。

「あのれ、プリキュアめぇ！邪魔をしおって！貴様らさえいなければ征服できたという事を！」作戦が失敗されて、プリキュアに何度も破られた事で怒りを燃やすヘルエビルの首領。

「必ずプリキュアを血祭りにしてくれるわ！」一人廊下を歩き回るザーゴードは作戦が失敗した事をすでにわかりきり、自らプリキュアを倒しにいこうとミッドスターへ一人で向かおうとした。

「ようやく俺の出番か、プリキュア、おまえ達の力どれだけの者か見せてもらうぞ。」ヘルエビルの幹部ザーゴードがミッドスターへ向かおうとする。ザーゴッドは一体どんな力を秘めているのか、果たして・・・・・。

次回　９話へ続く

第9話　強くてやばい敵が現れて大ピンチ！（前書き）

今回はザーゴットとの初対決で、ヘルエビルの幹部の人である彼との対決は激しい戦いになります。

第9話　強くてやばい敵が現れて大ピンチ！

プリキュアとの戦いで幾たびに負け続けていくヘルエビル。そんな中まだプリキュアと一度も交えた事もない幹部の一人サーゴットが一人でウリキュアのいるミッドスターへ踏み入れた。

「・・・・。」何も口を出さず、そのまま無言で筋化に歩いていくザーゴット。

「（プリキュア、おまえ達がどこまで強いのか俺がこの手で試させてもらうぞ。）」プリキュアを倒しに一人で戦うことを決めるザーゴット。一方、いつものように元気よく登校するアイとマコト。

「今日も元気でいい一日だわ。」

「相変わらずいつも元気ね。」

「マコト、学校まで一緒に走って競争しない？」

「いいわ。どっちが早く着くか勝負よ。」

「じゃあ、いくよ。」

「よーい、どん！」学校まで走って競争してどっちが着くか勝負して、元気よく走り出す二人。このままずっと走って走りながら学校への道を突き進んでいく。

「アイもやるわね。」

「マコトもずいぶんあたしと同じくらい早いわ。」二人とも走る速さは同じで、ほぼ同じペースで走っていた。そんな二人が走っている姿を遠くから見つめるサーゴットは。

「走っているのがプリキュア二人か。」以前公園でプリキュアに変身して戦う姿を見て、すでにプリキュアの正体も把握し、彼はプリキュアと戦うには今ここで戦わず、まずは様子を見ながらタイミングを図ろうとした。ようやくが学校へ到着し、教室でクラスのみんなと一緒に楽しい会話をしていく。

「へぇ、アイとマコトはいつもお母さん達と一緒に過ごしたりすることが多いんだ。」

「うん。」

「休日はママ達と一緒に過ごしたりして、家族一緒にいることが多いのよ。」

「お母さんのことといつも大好きなんだね。」

「うん、あたしママ達と一緒にいるのがものすごく好き。」

「家族でいるのが一番だから。」

「へぇー。」

「家族で一緒にいるときは何かしたりするの？」

「いろいろ一緒にやったりすることくらいかな？」由樹達に休日はいつも何をしているのか聞かれて家族と一緒に過ごすことが多いと

答え、アイとマコトはラブとせつなの二人の母親といつも一緒にいることが多く、一緒にいる日は家族揃って家事をしたりすることが多く、家族と過ごす時間をいつものように過ごしたりしていた。

「いつも一緒なんだね。」

「まあ毎日のようにかしら？」

「うふふふ。」クラスのみんなとなり下なく楽しそうに会話をし、それから時間が経って、お昼の時間を来て母せつなが作ってくれたお弁当を食事を取るアイとマコト。

「あたしとマコトのお弁当はいつも一緒だね。」

「せつなママがいつも朝早くから起きて毎日お弁当を作っているんだね。」

「せつなママも大変だね。」

「せつなママがいつも作ってくれたお弁当に感謝込めていただきます。」母せつなの作った弁当を口にして食べながら、いつも毎日のように作ってくれた事を感謝を込めながら食べた。二人はお弁当のおかずを一粒残さすに食べて、母親の作ったお弁当をおいしく味わいながら食べた。そしてそれから授業が終わって、2人は自宅へ帰る際に由樹達と一緒にバーガーショップに立ち寄って、そこでおやつを食べながら過ごす気分を取った。

「たまにはこういう所によるのもいいわねぇ。」

「由樹達と一緒にこうして食べていくのもいいわ。」

「あらあら二人ともお母さんは黙ってこういうところに寄ったりしないの？」

「もう美佳ったら突っ込まないの。」

「アハハハハ、冗談冗談よ。」

「まあ、アイとマコトも案外こういうところとかはたまにいったりしているんだろ。」

「うん。」

「アイと一緒に二人で食べに行ったりすることがあるのよ。」

「おまえ達双子はいつも一緒だな。」

「まあそんなところかしら？」クラスのみんなと会話をしながら食事をしたりして楽しい時間を過ごしていくアイとマコト。彼女たちが会話をしているのを遠くから席で一人座ったままでいるザーゴット。そのままドリンクを飲みながら彼女たちを視察していた。そして、自宅に帰って部屋でベットの上に座って、それぞれにリンクルンを出してピックルンに刺して気分よく落ち着かせた。

「ふうー、気持ちいいわぁ。」

「やっぱり疲れた後はリラックスよね。」

「キー。」

「キー。」ピックルンのリルンとミルンが二人に懐いた。

「リルンもすっかりあたしのことが大好きなんだね。」

「キー。」

「ミルンもいつも私のことを大切に思ってるんだね。」

「キー。」リルンとミルンは二人をいつも大切に想っており、そんなにピックルンを二人は心から大切に想った。

「ご飯よー。」

「はーい。」二人は下に降りて夕食を取り、家族揃っていつものようにおいしい食事をしながら家族で会話をした。

「今日は人とよく話したりすることが多い1日だったわ。」

「何言っているの？いつものことでしょ。」

「アハハハ、そうだったかしら？」

「もうすっぽからして。」

「ママもいつもそうなんだから。」

「うふふふふ。」学校や家でもいつも明るく楽しそうな雰囲気で会話をしたりするアイとマコト。二人はいつも争うごとや悲しみもなく明るく笑顔で楽しく過ごしていた。そんな夜の中、一人歩道橋で立ったまま夜空の景色を見つめるザーゴットは鞘から大太刀を抜い

た。

「プリキュア、明日おまえ達がどれだけの力を秘めているのか試させてもらうぞ。」そして翌日、今日は学校がおやすみで家族揃って買い物に出かける桃園一家。

「らーんららんらーん♪」

「家族揃って買い物ー。」

「二人とも相変わらず楽しむことばかり考えているわ。」

「子供達も相変わらず小さい子供のようにわいわいするのが楽しみそうだね。」アイとマコトは子供のようにわいわい楽しんでまるで幼い子供のように騒ぐことが大好きにみえるようであった。

「今日の夕食は何かな？」

「何だろうね。」

「それは行ってみてからお楽しみよ。」

「もうラブママったら突っ込まないの。」

「ええ、ひどい。」

「ラブの昔みたいに相変わらずね。」楽しそうに賑やかに歩いていく4人。だが、後ろから4人を追尾するように少し離れた距離で歩くザーゴット。せつなは自分達の後ろを追尾してくる者に気づき、なるべく避けるように3人に少し速く歩くように言い出した。

「ねぇ、3人ともちょっと速く歩いていこうかした？」

「えっ、どうしたの急に？」

「買い物込んじゃうから早くしたほうがいいかしら？」3人がまだ自分達の後ろから追尾してくる者に気づいておらず、せつなは何とかごまかして急いでこの場から離れるように3人を連れて歩く速度を速く歩き出した。自分の行動が気づかれてそのまま歩いたまま4人の後ろを追尾した。

「（まだ追ってくるわ。）」まだ後ろから追い続けられてきて、何とか切り抜けようとして道角が4つに別れてて、その右の角に曲がって急いで進んだ。

「しぶどい奴だな、なら1発お見舞いするか。」左腰にかけてる鞘から大太刀を抜いて真空波を放った。

「きゃああっ！」ザーゴットの放った真空波で吹き飛ばされた4人。

「ううう・・・・。」

「そろそろ変身したどうだ、プリキュア。」

「！！どうしてその名前を？！」

「おまえ達のことは全部見せてもらったぞ。」

「あんた何者？！」

「俺か、ヘルエビルの幹部ザーゴット。」

「あいつらの仲間ね。」

「ああ、俺はおまえ達プリキュアがどれだけ強いのかこの手で勝負していこうと思っている。」

「せっかくの買い物が台無しね。」

「悪いな、俺との勝負に付き合わさせられて。」

「でも戦うしかないわ。」

「相手はヘルエビルの仲間なら容赦しないわ。」

「そうこなくてはな。」ザーゴットに勝負を挑まれて、その勝負に乗ってリンクルンを取りだしてプリキュアに変身した。

チェンジ！プリキュア！ビートアップ！」光が満ちて、母子４はその光によって髪と服が一変し、髪は伸び、服はダンス衣装のようなドレスに身を包み、腰にリンクルンをかけた。プリキュアに変身した４人に近づいて大太刀で斬りかかるザーゴット。ザーゴットの大太刀が正面から直接突きつけてくるのをかわして、４手に分かれてザーゴットを攪乱させる為に彼の周りを動いた。

「はあっ！」ジャンプしながら高く飛んでザーゴットの周りを動き回り、また自分の周りに近づいてくるプリキュアに大太刀で大きくストレートしながら身体ごと回転して斬りかかった。

「わあっ！」アップルはザーゴットの大太刀が斬りかかってくるの

を緊急回避して横にかわした。
「危なかった。」
「瞬発力はあるそうだな。」
「はあああっ！」ピーチが拳で勢いよくザーゴットに殴りかかろうとするが。
「！！」　大太刀でピーチの拳を受太刀した。
「ぬううっ！」
「俺がそう簡単にやられるとでも思ったか。」力一杯出し切って、ピーチを押し返した。
「ああああっ！」
「ピーチ！」
「ピーチママ！」
「相手もそう手強いってことね。」
「ふっ。」プリキュアを圧倒するほどのその力を持って押し返す力を見せたザーゴット。そのままダッシュしながらチェリーとパッションの所へ斬りかかった。
「来るわよ！」ザーゴットの大太刀による居合い斬りから剣風が生じられて、その発生した剣風を両腕をガードして防いだ。

「ああっ！」

「チェリー！」

「パッション！」

「相手は手強いってことね。」ザーゴットの実力を知って、相手は今までにない手強い敵と判断し、油断は禁物と警戒する。

「あいつを何とかやっつけないと。」

「そうね、じゃああれで行くしかないわね。」リンクルンを出して、４人は光の力が宿ったマックスブレスを出現させてそれぞれの腕の装着した。

「４人とも行くよ！」

「うん。」マックスブレスを装着して、能力などが上昇してパワー、スピード等がアップして、４人同時にザーゴットに挑んだ。

「はあああああー！！」拳を繰り出してザーゴットに向けたが、

「！！」大太刀で９０度の角度を振り切って４人をまとめて切り払った。

「くううっ！」ザーゴットによって攻撃を見切られて、牽制されてしまい、全く攻撃を与えることも出来ずにいた。

「強い。」

「あいつ、私たちの攻撃を簡単に。」

「まるでつぼみが昔戦ったダークプリキュアと同じみたいだわ。」

「桁外れって所ね。」

「まだ終わりではない。」攻撃したついでにひたすら大太刀でプリキュアに1人ずつ近づいて剣術で斬りつけていった。

「きゃあああっ！」ザーゴットの剣術で斬りつけられて、大きめダメージを負わされた。

「はあ、はあ。」

「このままじゃこっちがやられちゃうわ。」

「マックスブレスを着けても倒せないの？」

「今度はスプラッシュリングを着けて戦うしかないわ！」

「そうするしかないわね。」今度はスプラッシュリングを出現させて、装着して今度は特殊能力を強いた勝負に挑んだ。４方に分かれて空を飛びながら、ガーレットを周りから攻撃を仕掛けていく。

「空を飛んだのか、厄介だ。」プリキュアが空を飛んで行動に移ったことによって、ややこしくなり、戦う姿勢は崩していなかった。

「いくよ！」空高くから急降下してエネルギー弾をザーゴットに向けて放つアップル。アップルが放ってくるエネルギー弾を大太刀で

次々と切り払い、完膚なく切り落としていくザーゴット。

「次はこれよ！」続いて空中からチェリーによる突風を放った攻撃でザーゴットに向けて流して、ザーゴットの姿勢を崩そうと狙った。

「くぅっ！」突風のせいで姿勢が崩れようとするが、

「こんな程度で俺は負けん！」力一杯出し切って、足に力を入れて突風を耐え抜いていた。

「嘘、リーフィアを吹き飛ばしたのに何で！」

「少しはてごたいがあるそうだな。」改めてプリキュアの力を実感したザーゴットは、これほどの力があることで手強いとそう判断した。

「これはどうかしら？」続いてピーチとパッションによる空中からの同時攻撃でお見舞いしようとした。

「ダブル・プリキュアキック！！」二人のダブルキックで急降下しながらザーゴットに直撃を食らわせた。

「ぐわぁっ！」二人のプリキュアの同時攻撃で押されていくザーゴット。激しい戦いの中、お互い必死でやり合って戦い続けていた。

「やるな、こちらもすぐにケリを着けさせてもらうぞ。」大太刀を構えたまま上に挙げて居合いさせながら集中して刃を発光させた。

「ん？！」

「何なの？！

「必殺奥義、天華鷲光円！大太刀を構えたまま腕を１８０度回転させて、回転した１８０度から作られた円形から光線が出現してプリキュアに向けられた。

「何か来るわ！」ザーゴットの剣技で作られた円形から光線が放たれて来て、その攻撃を防ぐ為バリアを張ってガードした。

「くぅ！」

「ああっ！」だがその技の威力でバリアが砕かれてしまい、その威力ごと押されてしまった。ザーゴットは高くジャンプして大太刀をプリキュア４人向けて構えようとした。

「一閃！」素早い振動力でその刃がプリキュアを閃光のような早さで１８０度の円形で斬った。

「きゃあああああああー！！」ザーゴットの必殺奥義によって倒されてしまったプリキュア４人。ザーゴットの強さを前に田土からもなく倒れ尽きたプリキュア４人。

「強すぎる・・・・。」

「こんなの初めてだわ・・・・。」

「今まで負けずに勝ててきたのに・・・・。」

「初めて負けるなんて悔しいわ・・・・。」

「・・・・・。」倒れたプリキュアを見てザーゴットは

「今日はこのくらいにしておく。次戦うときはおまえ達も強くなっているだろう。」そう言いながらザーゴットは勝負をお預けし、そのまま立ち去った。

「ザーゴット・・・。」

「あんな強い敵を見るのは初めてだったわ。」

「まま戦うとしたら・・・。」

「今度は負けるわけにはいかな。」初めて敗北したプリキュア。その敵の強さを改めて実感して、今度は負けないように再び戦う日までには必ずと胸にしまっておいた。

次回　１０話へ続く

第１０話　負けたくない、挫けるわけにはいかない！（前書き）

前回の続きです、前回の戦闘で敗北してやられてしまったアイ達。
街でヘルエビルが現れて、傷ついた状態で出る４人。

第１０話　負けたくない、挫けるわけにはいかない！

前回の戦いでザーゴッドとの戦闘で戦いに敗れてしまった４人、その１日が経ち今家で身体の傷を癒す為なるべく休んでいくアイ達４人家族は。

「あんな敵は初めてだったわ。」

「今まで戦った敵の中では初めてだったわ。」自分達が今まで戦った敵の中でもっとも手強いと感じてあそこまで追い詰められて今までにない戦いだと感じたラブとせつな。これまでの戦いでも過去に幾たびを重ねて勝ってきた二人は今回の戦いで初めて敗北してしまい、今までこんな事にはなかった事が全く予想もついてもいなかった。

「痛っ。」

「大丈夫、ラブ？」

「大丈夫よ。」

「あんなに強い敵は今まで初めてね。」ザーゴッドとの戦いで数を癒す為身体を休ませて落ち着かせてゆっくり休ませていく。その頃、ザーゴッドがプリキュアを倒したという方を聞いて祝賀会を開いて壮大に盛り上げる幹部達。

「ザーゴッドがプリキュアを倒したぞ！」

「オーホッホッホッホっ、あのプリキュアを見事簡単に倒すな

んて素晴らしいですわ！」

「ナーっ！」プリキュアが倒されてワルイナーと共に乾杯しながらはしゃぎながら盛んになって過ごしていくガーレットとリーフィア。

「ハッハッハッハッハ、もっと飲めお前ら！」プリキュアの敗北を大いに盛り上がって祝う中、プリキュアを倒したザーゴットがやってきた。

「ザーゴッド！」

「ザーゴッド！」

「ナーっ！」

「さっきから騒がしいぞ。」

「おお、お前はよく我々の大の天敵プリキュアを見事倒したそうだな。」

「うふふふ、あなたもよく頑張ったそうですわね。」仲間からプリキュアを倒して喜ばれて褒め言葉を贈られるザーゴッド。

「あれで俺は勝ったつもりじゃねぇ。」

「何？！」

「何ですって？！」

「プリキュアを倒したからって、いちいち騒ぐ必要はないだろ。」

「何だと、貴様どういうつもりだ！」

「ザーゴッド、あなたどういうつもりなの？」

「・・・・・・。」

「また黙り込んだようだな。」

「・・・・・・。」

「私たちはあなたを褒めているのですわ。」

「・・・・・・。」何も喋らず、無口のまま差のまま立ち去って消えていくザーゴッド。

「あいつは一体何がしたいのかがわからんな。」

「あんな生意気な方がいなくても私たちだけでもプリキュアは倒せるのですわ。」

「あいつがいなくても俺たちだけならプリキュアは倒せるはずだ。」

「ええっ。」ガーレットとリーフィアは二人係でプリキュアを倒しにいく為ワルイナーを引き連れてミッドスターへ向かった。その頃、ベッドで身体の傷を癒す為に横になって寝込んでいるアイとマコトは。

「痛っ。」

「アイ、怪我は大丈夫？」

「平気よって、痛っ。」

「あんまり無理はしないで。」

「マコトの方こそ。」双子同士お互い気遣いながら心配し合っていき痛みを感じながら心配したりした。

「ねぇ、アイはもしまたザーゴッドみたいなのがまた現れてやられたらどうする？」突然マコトからザーゴットのような強い敵が現れて、戦ってやられたらどうするのか聞かれたアイ。

「それは例えどんなに強い敵が来ても挫けるわけにはいかないわ。」

「そうね、プリキュアは例えどんなに強い敵が現れても挫けるわけにはいかないからね。」

「うん。」二人はプリキュアとしてこれからもどんなに強い敵が来ようとも、戦って負けて挫けるわけにはいかない、今までのプリキュアはどんなに強い敵と戦ってくじかず負けない、みんなを守りたいと言う強い想いを持ちながら戦い続けた。二人の話しているところをドアから立ちながら聞く母親のラブとせつな。その頃、ミッドスターにて心星町で街へ現れたザーゴットとリーフィアはワルイナーを引き連れて街で暴れて始めた。

「きゃあー！」

「うわあー！」ヘルエビルの軍団から逃げ回る人達。大斧を売り回して下に降ろして地面をひび割れを起こして近くにいる人立ちを揺

らした。

「オーホッホッホッホっ！」扇子で風を起こして逃げ回る人達を吹き飛ばして攻撃したりするリーフィア。街の建物に侵入して中にいる人達に襲いかかって暴れたりするワルイナー。街でヘルエビルが暴れているのをリンクルンの反応をキャッチしたアイ達４人。

「リンクルンからの反応だわ、ヘルエビルが街で暴れているみたいだわ。」

「よりによってこんな時に。」

「今は戦っていくしかないわ。」

「今ここでやらなきゃあたし達が廃るわけにはいかないわ。」

「そうね、怪我をしてでも今は痛みをこらえて戦うしかないわ。」前回の戦闘で戦った傷の痛みがこらえながらプリキュアとして世界の平和を守る為に悪と戦わなければならない４人。自分達がやられ続けてしまうとみんなが犠牲になってしまい、そんなみんなを悲しませないように自分達が今やらなければならないとそう決心した。

「行こう。」

「うん。」４人は外へ出て街で暴れているヘルエビルの所へ向かった。街の方では一方的に暴れまくってめちゃめちゃにするガーレット達。街の人達を恐怖を植え付けておびえさせていき、自分達の力を見せつける為恐怖で脅していった。

「フッハハハハハハハっ、俺たちの力をもっと怖がるがいい！」

「私たちの力を思う存分に怖がって味わうのですわ！」

「ナー、ナー！」

「後はプリキュアさえ倒せばまずはこの世界への征服も完了という事だな。」

「そんな事はさせないわ！」

「！！」街で好き放題暴れるガーレット達の前に４人のプリキュアが現れた。

「来たか、プリキュア。」

「ようやくお出迎えの所ですわね。」

「あんた達の好き勝手にはさせないわ！」

「これ以上街で暴れるんなら私たちが相手よ！」

「そお、身体の傷を負っている状態でどう戦うのかしら？」自分達の身体の傷を負っている事を指摘されながら身体の傷を負ってでも戦う事を決め、街で暴れているヘルエビルから守り抜く為、傷ついた身体で挑んだ。

「強気な姿勢もここまでのようだな、ワルイナー、今に弱まっているプリキュアを仕留めろ！」

「ナー！」ザーゴッドとの戦闘で傷ついたプワルイナーにプリキュ

アを攻撃させていくガーレット。

「うっ。」

「ママ大丈夫？」

「平気よ、二人とも身体の方は大丈夫？」

「こっちも大丈夫よ。」

「何とか大丈夫よ。」

「長時間だとあまり身体が保たないからなるべく早く終わらせないと。」

「わかっているわ、それと来るわよ。」なるべく身体の方も考慮しながら長時間での戦闘を避けるようにしていき、アップルは近づいてきたワルイナーを手で掴んで他のワルイナーに向けて投げ飛ばした。

「数が多いからってあんまり調子に乗らないでね！」チャリーは2体のワルイナーの頭を掴んで、それぞれの頭をぶつけさせていった。

「来るわよ、ピーチ！」

「わかっているわ！」二人の周りからワルイナーが6体襲いかかって、黒い棒を持ちながらピーチとパッションに叩こうとした。

「はあああっ！」身体を逆立ちして、地面に着いた両手を回しながら足を広げてワルイナー3体を蹴り飛ばすピーチ。高く飛び跳ね

場がら身体を回転してワルイナー3体を殴って蹴って飛ばすパッション。

「あいつらなかなかやるようだな。」

「では、こちらも参るとするですわ。」４人が苦戦もせず、善戦しているのを見て自ら戦いの場に出て二人一緒に挑むガーレットとリーフィア。

「ガーレットとリーフィアよ！」

「プリキュア、覚悟するがいい！」大斧を両手に構えながら大きく振り回してアップルとピーチに向けて降りかかろうとするザーゴッド。

「来るわよ！」ザーゴットの降りかかってくる大斧をマックスブレスを装着しながら二人一緒に斧を防いだ。

「ふぃ、やるようだな。だがいつまでお前達の身体が持ちこたえるのか。」二人の足元を見て足の力が弱まっているのを見抜いて、容赦なく二人を押し返した。

「あああああー！！」続いてスプラッシュリングを装着して、空を飛び回りながらチェリーとパッションの二人は地上にいるリーフィアに向けて突風を放ち、それに対して扇子から風を起こして風同士の対決をするが。

「どうやらあなた方は長時間では保たないそうですわね、それに力もだいぶ抜いているようですわね。」長時間による戦闘で身体が保たなくなってきた事で、さらに力も抜いてきた。

「ですが、これで終わりにして差し上げますわ！」力を思いっきり押し返しながら空中に飛んでいるチェリーとパッションを勢いよく飛ばして落下させるリーフィア。前回の戦闘でまだ傷が治っておらず、逆に傷の悪化を招く事になってしまった。

「あああああっ！」地面に落下して倒れてしまったチェリーとパッション。

「どうしたもう終わりか。」

「まだよ、まだ諦めるわけにはいかない。」身体が保たなくなってきてもそれでも立ち上がろうとする４人。

「しぶといです話な、ザーゴッドとの戦闘であなた達はだいぶやられたそうで、そんな身体で戦えるとでも思ったのですか？」

「戦えるさ！」

「私たちは身体がどんなにあってもそれでも戦うわ！」

「ふっ、そんなに死にたいというのか。ならば望み通り４人揃って死ぬがいい！」両手から火炎弾を無数に放ち、弱っているプリキュアに向けて倒そうとする。ガーレットの放った無数の火炎弾をチェリーとパッションがスプラッシュリングでバリアを発生させながら防いでいき、身体が弱っても今ある力を全て出し切っていきながら奮闘する。その隙を利用して、アップルとピーチが左右に分かれて飛びかかってガーレットとリーフィアに向かって拳で思いっきり殴りかかった。

「ぐぅ！」

「ぬぅっ！」問いかかって現れた二人のプリキュアの攻撃を食らったガーレットとリーフィア。今度は自分達が反撃を行おうとするが、

「そうはさせないわ。」続いてチェリーとパッションが二人同時に空中からダブルキックでお見舞いする。

「ぐうううっ！」二人の同時攻撃を食らって反撃に失敗してしまい、身体の限界を超えてなおも戦い続ける４人のプリキュア。

「はあ、はあ、はあ、はあ・・・・。」

「お前達もそこまでしてしぶといな。」

「あなた方もそんなからでまだ戦う力が残っていたなんて意外ですわ。」

「その戦う根性は認めるが、ここで終わらせてもらうぞっ！」ガーレットの炎に纏った拳がプリキュアに向けて勢いよく殴りかかろうとするが。

「そこねぇ！」ガーレットが近づいてきた瞬間、アップルは彼の間合いに飛び込んでぎゅっと握りしめた拳で彼の腹に食らわせた。

「ぐおおおおおっ！」アップルの渾身のこもったその拳によって動きを崩してしまったガーレット。

「ガーレット！」

「あんたの相手はここよ！」ガーレットの事を気をしている間に、チェリーが近くに現れてスプラッシュリングによる至近距離からのエネルギー光弾を無数に放ち、その攻撃によって大きなダメージを負ったリーフィア。

「ぎゃあああああー！」ガーレット、リーフィア両者ともにプリキュアの攻撃でダメージを負い、プリキュアとの戦いで身体も保たなくなり、体力も落ちてきた。

「くぅ、身体がこんなところで・・・・・。」

「大丈夫ではなさそうですわ・・・・・プリキュアを少し侮ってしまった。」

「こっちも負けるわけにはいかないわ！」

「くぅ。」激しい戦いの中、敵味方も身体も保たなくなってきてそろそろ限界がきて体力も減ってきて、身体の限界もきてこれ以上の戦いは出来そうな状態でもありながらそれでも戦いを続けていた。

「そろそろ終わりにしようじゃないか。」

「こちらも早く終わらせていくですわ。」

「そうね、早く終わらせないと。」それぞれ、早期戦による決着をつける為最終行動に出た。

「プリキュアファミリーハート！！」４人ののプリキュアから放つハート型の光線出してガーレットとリーフィアに向けようとしたが

「こちらからもいくぞ！」

「ええっ！」ガーレットの拳から炎が放たれ、リーフィアの平手から風は出現して、炎と風が一体化して炎の風となってプリクアに向けられた。また両者が放った技と技のぶつかり合いで激しい衝撃を引き起こした。

「ああっ！」

「ううっ！」

「きゃあっ！」

「うわぁっ！」

「ぬぅ！」

「くぅっ！」その強い衝撃で６人は吹き飛ばされて、地面に倒れ込んだ。

「ここまで追い詰められるとは思ってもいなかったな・・・。」

「うううっ、プリキュア、まさかこれで強うとは思ってもいなかったですわ。ザーゴッドとの戦いで敗れてもここまでこんな力があるなんて・・・・・。」

「もう言うな、ここは退き上げるぞ。」二人は改めてプリキュアの力を知って、今後侮れない存在として心に閉まって、この場から去った。また倒れた４人はピーチが苦しながらリンクルンを出して、ワープ機能を持つようになったピルンを刺して自宅まで移動した。

「今日もまた激しい戦いだったわ。」

「あそこまで戦えたってママも久々だったかな。」

「今日もまた身体をしっかり休ませていかないと。」

「何かピックルンで傷を癒す方法はないの？」

「アイとマコトの持っているピックルンで何となるんじゃないのかしら？」

「ママ、そうのんきに決めないでよ、こっちだって疲れているんだから。」

「ごめんごめん。」

「今日はゆっくり休んで身体を落ち着かせていかないと。」こうして４人は激しい戦いの中から、傷をいやしながら家族４人で心地よい時間を過ごしていった。

次回　１１話へ続く

第１１話　好き嫌いはもうほどほどに（前書き）

今回は好き嫌い物です、今回はせつなメインで、アイとマコトの好き嫌いで・・・・。

第１１話　好き嫌いはもうほどほどに

「アイ、マコト、二人ともご飯の時間よ～。」せつなに夕食の時間を呼ばれていつものように家族揃って食事する。だが、

「ええー、何でにんじん入れるの？！」

「何でピーマンも入れるの？」

「野菜は体にいいからよ。」

「もうそんなの関係ないでしょ。」

「嫌いな野菜が健康だからって何か意味でもあるの？」アイとマコトは自分達の嫌いな自分達の嫌いな野菜を料理に入れる母せつなに文句を言い出した。

「二人ともちゃんと嫌いな者は残さず食べなさい！」

「もうせつなママだって昔はピーマンが嫌いだったくせに。」

「コラっ、昔の事をいちいち出さないの！」

「人の事言えないくせに。」

「ほんと。」

「ちょっとっ！」

「3人とも落ち着いて、あたしだって昔はにんじんは苦手だったのよ。昔はいろいろあったのよ。」

「ラブ、あんまり子供達を甘やかさないで。」

「せつなもあんまりごちゃごちゃあれこれあんまり言わないの。」

「もうラブったらいつもそうなんだから。」ラブとせつなの二人のやり取りもいつものように相変わらず変わっておらず、いつもラブに対して突っ込むせつな。そこが二人の毎回の日常でもあった。

「二人ともちゃんと野菜は食べるのよ。

「いやだー。」

「ごちゃごちゃ言わないで食べるのよ。」

「食べたくないのに・・・・。」アイとマコトはそれぞれ出された野菜を嫌々そうに口に入れながら食べた。食事が終わって、二人は部屋に入って机で自分達や母の事について話し合った。

「マコトはピーマン嫌いだよね。」

「アイもにんじんが嫌いみたいね。」

「お互い様好き嫌いがあるね。」

「うふ、そうみたいね。なんだか子供みたいかな・・・・。」

「あたし達子供なんだから子供っぽい所があるのよ。」

「子供だからかな。」

「ママも二人いて、いつも一緒に過ごして女だけの家族ね。」

「ママが二人いてラブママとせつなママはいつも仲良しで家族の事を想っているわ。」

「でもせつなママはいつも嫌いな野菜ばっかり入れてくるからね。」

「嫌いな野菜もほどほどよね。」

「ピーマン、にんじんが毎日料理に入れられてもういやだ。」

「へぇー、誰が嫌いな野菜ばかり入れるって。」二人の話を聞いて割り込んできたせつな。

「わぁっ、せつなママ！！」

「せつなママ・・・。」

「聞いていたわ。私が嫌いな野菜ばかり入れてけちをつけているって・・・・。」

「ぎくっ。」

「うげっ。」

「二人とも罰として当分の間嫌いな野菜を食べるのよ。」

「えええー！」愚痴を言われて怒ったせつなは、二人に嫌いな野菜を使った料理を当分の間作る事にした。次の日の夕食は二人の嫌いな野菜を使った料理が置いてあった。

「ああっ・・・・。」ピーマンの肉詰めとにんじんのサラダ、アイとマコトの苦手な物ばかりであった。

「食べたくないな・・・・。」

「今日の夕食はまずいは・・・・。」

「コラっ、ちゃんと残さないで食べなさい！」

「にんじんは無理。」

「ピーマンはダメ。」食べる前から嫌々しながら口にせずしようとしない二人はいやがり始めた。

「アイ、マコト、わがまま言わないでちゃんと食べるのよ！」

「はあーい。」暗そうな雰囲気で嫌々口にしながら食べた。そして次の日も。

「またにんじん。」

「それにピーマン！」

「しっかり残さないで食べなさい！」毎日ピーマン、にんじんが出されて嫌々食べながら毎日のように苦々しく送るアイとマコト。二人は母せつなに毎回出されながら嫌々嫌いな野菜を食べる日々を送

る事になった。そして次の日、ピーマンとにんじんばかり出されて嫌々するアイとマコト。

「はあー、もう嫌いな野菜ばかり食べさせられるのはもういやだわ。」

「もうこりごりよ〜。」

「にんじんばかり食べさせられると本当にイライライしちゃうからさ。」

「ピーマンばっかりで本当に無理矢理食べさせられる身も考えて欲しいわ。」二人は母せつなに無理矢理嫌いな物ばかり食べさせられて嫌いな食べ物を食べるのが嫌々になって毎日出されるのもほどほどであった。

「愚痴言われたからって毎日嫌いな野菜を出す。そんなのおかしいわ。」

「せつなママも昔はピーマンが嫌いだったくせに私たちに無理矢理嫌いな食べ物を押しつけるのもいい加減よ。」

「もうにんじん食べるのも飽きたわ！」二人はそう言いながらピーマンやにんじんなど出されて食べるのにもほどがあり、我慢するのも限界が来て二人はこっそり今日の夕食が嫌いな野菜ばかりでないようにどこかでお腹を満たしていこうと考えていた。

「今日の夕食もまたにんじん、ピーマン入れたりするから今日の夕食は家で食べないでどこか食べれそうな所でも行こうかな？」

「そう、それがいいかも。」二人は街に入って飲食店を見回り、二人はお腹いっぱいになりそうな店を探し回っていた。親に内緒でこっそりおいしそうな店で食事を取ろうと二人だけで考えた。

「二人とも家にいないわ。」

「どこに行ったのかしら？」二人が家にいない事で心配するラブとせつな。

「今頃家に帰ってももう夕食を作っている頃なんだから、またにんじんやピーマンとか入れるよ。」

「あんまり遅すぎるとかえってママ達も心配しちゃうから。」

「・・・・・。」

「どうしたの、やっぱり心配しているんじゃない？」

「ううん、それよりいきましょう。」アイは家に帰らす、店で食事を取る事を決めて、二人は近くにある食堂に入った。二人は席に座って何を頼むのかメニューを見ながら考えていた。

「いろいろあるわ、ここでママの料理よりもおいしそうだわ。」

「メニューは豊富よね。」

「何頼もうかな。」二人はメニューに載ってある物を見ながらおいそいものいっぱい食べてお腹が満腹になる食べ物を探した。二人遠くの隣に座っている席で一人でこの店で食事を氏に来たガーレット。

「この世界にこんなのがあるとは驚きだな。」飲食店を始めて光景して、ガーレットはまだ飲食店というのが全く初めてでここで何をするのかわからず、ただメニューばかり見ていた。

「うーん、ここは一体どういうところだ。理解しにくいな、ここでもいらいらしてしまうな。」

「うーん、何かおいしそうな物・・・・。」ミューを見ながらよく考えて決める二人。遠くの隣に座っているガーレットは。

「あああ、ここにいるだけでもいらいらしてしまうな。こうなればまたこの街ごと吐かしてくれるわ！」戦闘時に変身して、不気味なカードを取り出した。

「出よイライラー！」不気味なカードを店員が運んでいるどんぶりに向けた投げつけて、イライラーを呼び出した。

「うわぁっ、うわあああー！」

「アイ！」

「えっ、わああー！」店内からイライラーが現れて、店内からあわてて逃げ出して初めて。どんぶりイライラー街で暴れ始めた。

「せっかく決めようと思ったらイライラーがこんな所まで現れるなんて！」

「そんな事より街で暴れ出しているのを何とか止めないと。」

「今度はイライラー、ああ今日も最悪な1日だわ。」

「アイ！」

「わかったから、せっかくママ達に内緒でおいしい物を食べよう下のを潰してくれたなんてもう許さない！」　せっかくごちそうを食べようと思ったところイライラーが現れたせいで台無しになり、二人はリンクルンを取りだして、プリキュアに変身し始めた。

「チェンジ！プリキュア！ビートアップ！」光が満ちて、アイとマコトの2人はその光によって髪と服が一変し、髪は伸び、服はダンス衣装のようなドレスに身を包み、腰にリンクルンをかけた。

「勇気と愛のハート、キュアアップル！」

「優しさと幸せのハート、キュアチェリー！」

「フレッシュプリキュア！！」プリキュアに変身した二人は、街で暴れているどんぶりイライラーに直接挑んだ。

「来たか、プリキュア。」

「ちょっとっ、せっかく決めようとしたところ何でいつも邪魔するのよ！」

「そんなの知った事ではない！」

「あなた、何でいつも毎回迷惑する事ばかりするの？」

「俺の気にくわない物は何でも壊す！」

「気にくわないからってそんな理由で物を破壊するなんて許さないわ！」

「黙れ、お前達に幾たびにやられ続けている俺の気持ちがわからないか！」

「八つ当たりしないでもらわない？」

「ならここでお前達を始末してやる、イライラー！」直接近づいてくる二人にどんぶりイライラーはふたを開けて中から野菜いっぱいの怪物を出現させた。

「げっ、中から嫌いな野菜が出てきた！」どんぶりイライラーから現れた野菜から自分達の嫌いな野菜ばかりだった。

「こんなのと戦うの無理ー。」

「何で戦闘の時もこうなるのよ・・・。」嫌いな野菜を見て脱力し始めた。

「どうやらプリキュアにも弱点があったようだな。弱点があったとなら絶好の機会というわけだな！」プリキュア達が野菜の怪物で、いやそうな顔つきを見て苦手な物である事に見抜いて、プリキュアが脱力している事で一気に狙った。野菜怪物から逃げ回る二人は、苦手な野菜が怪物であっても戦う事すら出来ずにいた。

「どうしたら戦えばいいのよー！！」

「知らないわよ！！」

「にんじんの化け物相手なんて絶対無理だって！」

「こっちはピーマンの化け物相手と戦うのは無理よー！」

「何とかしてよー！」

「無理ってー！」

「どうしたらいいのー！」野菜怪物から必死で逃げ回っていきながら、戦う事が無理で嫌々叫びながら逃げて逃げて走り続けた。このままでは逆にやられてしまい、逃げて回る二人はピンチに陥り始めた。どんぶりイライラーのふたが飛んで、二人に襲いかかろうとしてきた。

「前から来るわよ！」飛んできたふたが接近してきて、ぶつかりそうになるところ二人は下にしゃがんだ。

「もう何でこうなるのよ！」

「もうこれじゃ戦えないわ！」

「イライラー！」どんぶりの中から大量の米粒の弾が一斉に撃ち出されて、体力の米粒の弾を食らったアップルとチェリー。

「きゃああー！！」

「これなら勝てる気も沸いてきたみたいだな。」複数の敵を相手に苦戦を強いられ、さらに苦手な野菜が怪物化となって悪銭も強いられるアップルとチェリー。

「もう無理よ、にんじんの化け物相手に戦うなんて正直無理。」
「私もピーマンの化け物を相手にするはもう無理無理！」このまま戦う気力も押してきて、戦いを諦めようとしまおうとする二人。
「二人ともここで諦めちゃだめよ！」もう諦めようとする二人の前に遠くから母の声が聞こえてきた。
「ママ・・・。」ピーチとパッションは遠くから高く飛んで複数の野菜の怪物にキックをお見舞いして、二人の元へ寄った。
「二人ともこんな所にいたのね。」
「うん。」
「どうして二人ともこっそり夕飯から抜けたの？」
「無理矢理嫌いな野菜ばかり食べさせられて、また入れようとするから。」
「また嫌いな野菜毎日入れられるとほどがあるよ。」
「ほら、また嫌いな物がどうたらこうたらってわがまま言わないの。」
「まあまあ、パッション落ち着いて。」
「子供達にあんまり甘やかさないの。」
「あんまり嫌いな野菜ばかり入れすぎるとさすがにほどがあるわ、

もうちょっとよく考えてみたら？」

「私はただその、二人の為に好き嫌いをなくそうと精一杯ご飯を作ろうとしたのよ。」

「せつなママ。」

「でも二人とも毎日出しても嫌々そうに食べていたわ。」

「好き嫌いもほどはあるのは確かだけど、毎日出されるとさすがにほどがあるわ。」

「ピーマンやにんじんばっかり毎回入れられると逆に余計好き嫌いになるわ、もう少し考えて工夫して。」

「・・・・・。」

「どうしたの？」

「ごめん、そう言われると考えもしないで野菜ばっかり入れすぎて逆だったわ。」

「ママ、こっちもごめんね。」

「いつも好き嫌いばっかりしてごめんね。」母娘それぞれ無理矢理いやいやな事をしてしまって悪い風になってしまった事を謝った。好き嫌いばかり合って、母を困らせてしまった事を深く反省し、また娘の好き嫌いをなくす為に野菜を毎日入れすぎて逆に嫌々してしまった事も反省した。

「せつなママの料理が嫌いじゃないから。」

「いつもせつなママの料理をおいしそうに楽しく味わって食べているから。」

「あたし達はちゃんといつも感謝しているよ。」

「二人とも。」

「それよりまずはイライラーをとにかく倒していかないと。」まずは周りにいるイライラーや野菜の化け物を対処しないといけないから、４人揃ってその対処に乗りかかりだした。アップルとチェリーからピーチとパッションはマックスブレスで装着して、家族４人による連係プレーを取り始めた。

「二人ともまずは野菜から先に片付けるわ、二人ともいくわよ。」縦１列に並んで正面から突っ走って進み出した。

「いけ野菜共、プリキュアをまた怖がらせてやれ！」野菜の化け物が正面から来るプリキュアに対して半径の図になって受け止めようとする。そうしたら縦１列からばらばらになって身体を３６０度回転しながら両脚による蹴りや拳を繰り出して野菜の化け物に食らわせた。

「はあああああーっ！」そうしたら次はキックで野菜の化け物に飛び跳ねて高く身体を舞いながら思いっきり強いキックで食らわせた。プリキュアの攻撃を受けた野菜の化けもは倒され、そうしたらどんぶりイライラーだけとなった。

「くぅ、イライラープリキュアをやってしまえ！」

「イライラー！」再びふたを飛ばして、２体がかりでプリキュアに襲いかかろうとしてきた。カーブを曲がっていきながら４人の周りを回って動きを牽制するどんぶりイライラーのふた。

「そんな子供だまし通じないわよ！」周りから少し離れた距離で近づいてすぐに拳を出してどんぶりイライラーのふたを吹き飛ばした。

「くぅ、イライラー！このままでは負けてはならん！なんとしてでもプリキュアを始末しろ！」プリキュアを倒そうとする為、中からまた米粒の弾が一斉に発射し出され、プリキュア４人に向けられた。

「えええーい！」まっすぐどんぶりイライラーの所まで突き進みながら大量の米粒の弾を拳ではじき返していき、そのまま飛んでどんぶりイライラーの中にキックをお見舞いした。

「グオー！！」プリキュアからの空中キックをお見舞いされて倒れ込んだイライラー。中から米粒がこぼれて弾を発射する事も出来なくなった。

「よし、これで終わりよ！」４人でそれぞれの手と手を取り合い、合わせた手を前に向けた。

「プリキュアの美しき魂が！」

「邪悪な心を打ち砕く！」

「アップルサンダー！」

「チェリーサンダー！」

「ラブサンダー！」

「ハピネスサンダー！」４人がそれぞれ召還した雷を同時に放たれる事で４つの雷を合体させた。

「プリキュア・ファミリー・スクリュー・フレッシュっ！」組み合わせた４つの雷は螺旋状の雷撃を生み出され、どんぶりイライラーに直撃を食らわせた。

「イライ・・・スッキリー・・・・・。」家族４人のプリキュアの合体技によって浄化されて元のどんぶりに戻った。

「覚えていろ！！」戦いが終わって、自宅に戻ってせつなは暖かい時間を過ごしていく為においしくて心地いい料理を作った。アイとマコトもちゃんとご飯を食べた。

「ねぇ、せつなママ。」

「せつなママ。」

「アイ、マコト、どうしたの？」

「やっぱりのせつなママの作ったご飯が一番だわ。」

「いつもおいしくて暖かく家族の為に迎える愛情だわ。」

「でもたまに嫌いなもは言っちゃうけど、でもそれでもせつなママは家族の事を想って作ってくれているんだからいつもありがとう。」

「せつなの料理はいつもあたしやアイやマコトのために作っていつもありがとう。」

「せつなママいつもありがとう。」

「ラブ、アイ、マコト。」３人はせつながいつも家族の為に想って家族の事をいつも大切にして、誰よりも家族を暖かく愛情、家族揃ってご飯を食べる事は家族との大事な時間を過ごす為に４人家族は大切に想うその心を大切にしていた。

次回　１２話へ続く

第１２話　家族揃って海へ（前書き）

今回も家族揃って海へ出かけるお話です。

第１２話　家族揃って海へ

「ただいま。」

「ラブ、お帰りなさい。いつも仕事大変ね。」

「うん、いつも大変よ。日曜日はおやすだからいいけどね。」

「ラブもあんまり無理はしないでね。」

「気遣ってくれてありがとう、せつな。」いつも仕事をしながら大変な日々を送るラブに対して気遣いするせつな。家族揃っていつもの一緒に食事を取りながら過ごしていき、ラブは子供達と一緒に楽しく会話をする。

「アイとマコトは今日学校でいい事があったんだ。」

「今日マコトと一緒に理科の授業で電気の実験をやったら光がぱちぱち明るくなったのよ。」

「まあ、理科室全体が明るくなったところよ。」

「へぇー、そんなにすごい事があったんだ。」

「えへへへ。」

「ラブママはいつもお仕事とか頑張っているでしょ？」

「もちろんよ。毎日こつこつ頑張っているわ。」

「ラブママも頑張っているんだね。」
「ママも上にいるくらいよ。」
「ラブもよく頑張っているわね。」家族一緒に会話をしながらやり取りして明るく過ごしていく４人。
「今度の日曜日海へ行かない？」
「海へ行きたい！」
「アイ、海で泳ぐのじゃないのよ。」
「はーい。」
「でも日曜日はいつも家族で過ごす事が多いわ。」
「この日はいつも一緒にいる事が多いわね。」
「日曜日は家族の大切な曜日だからね。」
「家族だけに幸せな１日を過ごしていきたいわ。」
「海へいくの楽しみ。」
「うん。」
「日曜日は家族の日～。」

「うふふ。」今度の日曜日に家族一緒に海へ行く事に決まって、日曜日は家族一緒に過ごす事が多くて、この日は桃園一家にとっての大切な曜日でもあった。次の日の日曜日、家族揃って海へ出かけて、浜辺で立ち歩いて下に落ちている貝殻などを拾ったりして他にも靴や靴下を脱いで水かけして遊んだりした。

「えいっ！」

「それっ！」

「やったわね、それっ！」水をかけて遊びながら子供のようにはしゃいだり無邪気に楽しそうにして過ごす４人。次に浜辺をかけっこして一緒に走りながら遊んだりして、家族の楽しい日曜日を楽しみながら大切に過ごしていくのであった。

「ふうー、遊んだらすっかり疲れちゃったわね。」

「そうね、一旦休憩でも取りましょう。」海で遊んだらすっかり疲れてしまい、４人は浜辺で一旦休憩を取る事にした。ビニールシートを下に敷いて４人一緒に座りながら海と空の景色を眺めた。綺麗で美しい自然に囲まれた海と空、その自然が汚されない事を祈りつつ４人はそう願った。４人が海でいる中、海岸の遠く離れた場所で一般姿のままで椅子に座って一人で快適よく過ごして寛いでるリーフィア。

「ふうー、一人でいるとなんだか快適よく過ごせますわ、ガーレットと一緒にいると暑苦しくてたまりませんですわ。ああ、一人でいるのは心地いいですわね。」ヘルエビルの本拠地でいつも騒がしい事が多くて静かに寛ぐ事が出来ずに、ミッドスターへ来て一人っきりでいた。

「プリキュアさえいなければ静かになっていますわ。」とつぶやくが、偶然遠くから４人が近くに歩いてきて来た。

「海へ泳ぐのはなんか残念だったわ。」

「見るだけでもいいいい機会だったと思うわ。」

「海はただ泳ぐだけじゃないのよ、こうして景色を眺めたり浜辺でかけっこしていろいろしたり楽しんだりして出来るわ。」

「後貝殻を拾って、拾った貝殻を飾り付けにするのもいいわね。」家族一緒に海で楽し遊びながら快適よく平和に過ごしていき、その平和の中で安らぎよく過ごしていくのであった。４人が歩いているのを見たリーフィアは、

「げっ、プリキュア！何でこんなところにいるの？！いつも毎回邪魔ばかりしているあの４人組めぇっ！」４人が歩いているのを見て、急に態度が変わり始め、戦闘モードに変身して４人に襲いかかろうとした。

「待て、お前ら！」

「？！」

「その声はリーフィア！」

「毎回いつもお前達がここに会いと私ももう限界ですわ！」

「何よ、いきなり悪さしているくせに偉そうな事言わないでよ！」

「それにいい年しておばさんが吠えてどうするの？」

「あたし達と同じ大人のくせにどうして八つ当たりしてくるの？」

「もうこれ以上暴れるんならこの世界に来ないでもらいたいわ。」

４人を襲うどころか逆にあれこれ言われて説教されてしまう挙げ句なったリーフィア。

「お黙り！もうこうなればここでやっつけて差し上げますわ！出よ、イライラー！」４人が海辺で拾った貝殻をイライラー化させて出現させた。

「ああ、あたし達が詰めた貝殻が！」

「ちょっと何するの！人がせっかく一生懸命集めた貝殻をイライラーにするなんて！」

「お黙り、あなたたちがここで消えれば済む事ですわ。イライラーやっておしまいなさい！」

「イライラー！」貝殻イライラーは近くにいるアイ立ち４人に襲いかかろうとしてきた。

「わぁっ！」貝殻から小型貝殻爆弾が落とされて、周りを爆発させた。

「綺麗な浜辺を荒らすなんて。」

「こうなったら変身するしかないわね。」

「うん。」リンクルンを出して、プリキュアに変身し始めた。

「チェンジ！プリキュア！ビートアップ！」光が満ちて、母子４はその光によって髪と服が一変し、髪は伸び、服はダンス衣装のようなドレスに身を包み、腰にリンクルンをかけた。

「勇気と愛のハート、キュアアップル！」

「優しさと幸せのハート、キュアチェリー！」

「ピンクのハートは愛ある印、もぎたてフレッシュ、キュアピーチ！」

「真っ赤なハートは幸せの証、熟れたてフレッシュ、キュアパッション！」

「フレッシュプリキュア！」プリキュアに変身した４人は自分達が拾った貝殻がイライラーとされて戦いだした。

「はあああああっ！」正面から先手を打ってパンチでお見舞いするアップル。アップルのパンチを貝殻の頑丈さを利用してガードした。

「いたっ、何この堅さ！」アップルのパンチ害とも簡単に防がれてしまい、近藤は上空から高く飛んでキックでお見舞いするチェリー。

「イライラー！」チェリーのキックを簡単にガードし、上から押し返した。

「きゃあああっ！」

「アップル、チェリー！」

「オーホッホッホッホッホっ、堅い物のであなた方の攻撃を防いで参りますわ。」

「偉そうな事いって。」

「攻めても逆に攻撃が防がれるから対処方法が難しいわ。」

「スプラッシュリングであいつの動きを攪乱させていくのはどうかな？」

「向こうがガードしてくるんならこっちは動きを利用してあいつの動きを崩していくわ。」貝殻の頑丈さを利用して攻撃をガードしてくる事に対してスプラッシュリングを利用して動きを攪乱させていく手を使って立てた。シュプラッシュリングを出現させて、それぞれに腕に装着してまずは４人の同時攻撃によるエネルギー弾を放った。

「イライラー！」４人の放ってくるエネルギー弾を貝殻でガードしつつ、守りを固めた。

「じゃあ、次はあいつの動きを崩す行動よ。」

「じゃあ早速いくわ、おーいガードばっかりしないで攻撃したらどうなの？」

「イライラー！」貝殻イライラーをわざと挑発させて、怒った貝殻イライラーはプリキュアを追っかけ始めた。

「追っかけてきたわ。」

「じゃあ早速動きましょ！」後ろから追っかけてきた貝殻イライラは頭を開いて小型貝殻爆弾を発射して４人に向けた。爆弾をかわしながら飛び回り、そうしたら貝殻イライラーの周りを飛び回った。

「イライラー！」自分の近くに飛び回っているプリキュア４人に拳で殴りかかろうとするが、あっさりかわされて攻撃を外した。

「ああっ、もう何をしているんですか！このまま恥をかくつもりですか！」

「イライラー！」

「イライラーが怒っているわ。」

「次も怒らせていかないとね。」

「今度は海よ。」次は海まで移動しながら誘導していく行動に移り、４人はそのまま貝殻イライラーを移動させて海の向こうまで向かった。

「イライラー！」

「よし。」スプラッシュリングで水面上を移動して突き進み、うまく海まで誘導させた。海まで追って来た貝殻イライラーは海へ入ったが・・・・。

「ん、イライラー！」海の中に潜り込んでしまっておぼれてしまい、

身動きできない状態に陥ってしまった。

「あああっ、イライラー！」

「かかったわね。」

「海の中に潜り込んだら逆に沈んじゃったわね。」

「今のうちにあいつをたたき出さないと。」海でおぼれているのをきっかけにその隙を狙いに行き始めた。４人同時に突風を起こして貝殻イライラーを海ごと突風で大きく吹き飛ばして海岸へ落下させた。貝殻イライラーは反撃に応じて頭の貝殻を開いて小型貝殻爆弾を一斉に放った。それをかわしていきながら貝殻イライラーの弱点を見抜いた。

「弱点は頭の貝殻の中ね。」

「そこを狙えばあいつもおしまいね。」

「じゃあ中を狙うわよ。」弱点を見抜いた４人は、貝殻イライラーが頭の貝殻が開くのを狙おうとした。

「ふん、イライラーやっておしまいなさい！」再び貝殻を開いて爆弾を発射しようとするが・・・。

「そうはさせないわ！」アップルがエネルギー光弾で開いた貝殻に中に向けて放った。

「グオオオー！」アップルの放ったエネルギー光弾で中に直撃をくらい、倒れ込んでしまった貝殻イライラー。

「よしいまよ。」４人のプリキュアが必殺技を構えようとした。

「精霊の光よ！」

「命の輝きよ！」

「希望へ導け！」

「全ての心！」４人の呼びかけて精霊の力を収束した。

「プリキュア・スパイラル・ハート・フレッシュっ！」収束した精霊の力をスプラッシュリングから４つの混ざり合った螺旋状のエネルギーを放ち、貝殻イライラーに向けた。

「イライ・・・スッキリー・・・・・。」４人の放った必殺技でハート型の枠によって貝殻イライラーを包み込み、浄化されて元の貝殻に戻った。

「覚えてらっしゃい！」この場から退いたリーフィア。そして景色は夕焼けになり、赤い空を見上げながら海を見る４人。

「こうして海を見ると景色は綺麗でいいわ。」

「夕日も見えるわね。」

「夕焼けになると空や海も真っ赤で綺麗ね。」

「そうね、こうして家族４人で見るもいいわね。」４人は夕日を眺めて海の遠くを見てまた家族だけにしわ瀬を感じたのであった。

次回　１３話へ続く

第１２話　家族揃って海へ（後書き）

次回予告、突如４人の前に現れた謎の新プリキュア。なんと今までのプリキュアを召還する力を持っていたのであった。果たして・・・・・

登場人物３（前書き）

１３話で出てくるプリキュアと今後出るとされるプリキュア５の力を紹介します。

登場人物３

アリス・ヴァンドレス（？歳）／キュアスティンガー
ＣＶ：藩めぐみ
突如、アイ達４人の前に現れた少女。彼女はネクロースによって雇われていてどこから来たのか不明で、全てのプリキュアの事を知っていて、彼女は一体何者のなのか不明である。また歴代プリキュアの力を奪って自分のもとして奪った力で召還する力を持つ。彼女は専用アイテム、キュアコンパクトでキュアスティンガーに変身する。

プリキュア
キュアスティンガー
アリスがキュアコンパクトを使って変身した姿。髪型はロングヘアーで色は黒。イメージカラーは黒で、服装の色全体が黒で、細かい部分は白、紺色。少しダークプリキュアに近い色で、悪役のイメージが強いと思われる。

専用武器
キュアサイズ
キュアサーベラスが使う専用武器。２種類の機能に変形して使いこなす武器。１つ目は近接時は鎌形に変形し、光の刃を出現させて鎌を振り回しながら相手を切り裂いていく。２つ目は遠距離時ライフルに変形させて、銃で威力の高いエネルギー弾を射撃していく。

キュアコンパクト
アリスがキュアスティンガーに変身する為にアイテム。色は黒でこれでプリキュアの力を簡単に奪い取る事が可能である。また他に通信したり、コンパクトでワープしたりする事が可能である。

必殺技

プリキュア・ヘルオブパニッッシャー

キュアサイズから放たれる漆黒のハート型の光線。その威力はとてつもない力を秘めている。掛け声は「闇よ、我に力を。」

アイテム

ファイブフルーレ

のぞみから授かった剣型の武器。キュアフルーレに似ている部分があり、赤い薔薇の力が宿っていて、光の刃を出現させて武器として使用する事が可能。高い斬撃力を誇り、強力な必殺技を放つ事が可能。

プリキュア・ファイブ・スラッシュ

４人が「４つの光を勇気を乗せて！」という掛け声とともに、４人がファイブフルーレで、相手に近づいて赤い薔薇の力が宿った剣で敵にとどめの斬撃を与える。今まで光線技に対して逆にこちらは剣で斬りつける技となっている。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3410z/

家族はプリキュア

2011年12月25日23時53分発行